假名遣除外例と常用漢字の增減

（昭和六年）

文部省國語調査會から發表

文部省臨時國語調査會では大正十三年十二月假名遣改定案を發表したが、その後多數の希望に本づき右案に關する次の如き除外例・なほ大正十二年五月發表の常用漢字表に修正を加へ增減したものを八日午後發表した、右常用漢字表によれば表中の千九百六十字中より百四十七字を削り更に新たに四十五字を加へたもので結局百二字を減じ千八百五十八字となつた

假名遣改定案に關する修正

一、國語假名遣改定案第二に左のたゞし書を加へる

たゞし（1）二語の連合によつて生じた「ぢ」「づ」はもとのまゝ

例 はなぢ（鼻血）もらいぢち（もらい乳）ひぢりめん（緋縮緬）ちかぢか（近々）たづな（手綱）みかづき（三日月）かなづち（鐵槌）つねづね（常々）まなづる（眞鶴）ぬまづ（沼津）

（2）同音の連呼によつて生じた「ぢ」「づ」はもとのまゝ

ちぢみ（縮）ちぢむ（縮む）ちぢに（千々に）つづみ（鼓）つづら（葛籠）つづく（續）

二、字音假名遣改定案第三に左のたゞし書を加へる

たゞし（1）連聲によつて濁る「智」「茶」「中」「通」等はもとのまゝ

例 さるぢえ（猿智慧）わるぢえ（惡智慧）はぢやや（葉茶屋）ちやのみぢやわん（茶飲茶碗）れんぢゆう（連中）くにぢゆう（國中）ゆうづう（融通）じんづうりき（神通力）

（2）呉音によつて濁る「地」「治」はもとのまゝ

例 ぢぬし（地主）きぬぢ（絹地）ぢろう（治郎）せいぢ（政治）

常用漢字表に關する修正

一、常用漢字表から削つたもの

云仙企但儒兎冠凝凸凹
刈勻匁匹卿叛叱呑嘗坐
垣塚妾嫉宇宛宰寡岬嶮
帖廟弘循忽悦戚托捌掘
效李杖桶梯棚樋檜歿殼
毫洲游溝漕濫灌烏熖煎
煤熊燭牒狐狼猿瓜畔疏
痕眺睦瞭秤稼穿笠箇篇
粟紗絞纂耽聘肋肯肴脂
脇腎腺膏膳臼舅艇艘芋
塋荻蒔蓮蔭薦薪藍蘇虜
袂袴詣誅誦誼諒諫謂謙
貢賑赦踏蹟蹴輔輝辻逢
那釘錦鍛鎌閏隅霞靴頃
須頒[illegible]騙鰹鼠齊（以上百四十七字）

二、新に常用漢字表に加へたもの

之亦伸佳俱克其冗剩厥
咸唯喫壤妥娼宏彰悖惟
愼扇披描揷斯映昭汰淵
爾環辮肅繫矜膺甕變諮
謬輯遼錯醱（以上四十五字）

心點

□□文部省の西山宗敎局長は監督權を振り廻さずに坊さんの喧嘩を圓くをさめるのがお得意だ、まづ雙方を局長室に呼んでからあべこべに釋尊の敎へを坊さんに說法して「まあ〳〵」と笑つて引取らせるのだがこれが案

文部省臨時國語調査會幹事
東京高等師範學校敎授　保科孝一序
奈良女子高等師範學校敎授　木枝增一編

臨時國語調査會發表

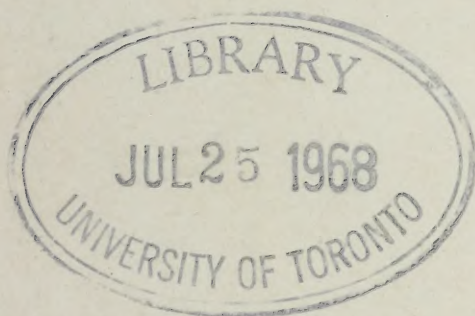
漢字漢語假名遣整理案

東京
大阪　東洋圖書株式合資會社發兌

文部省臨時國語調査會幹事　保科孝一序
東京高等師範學校敎授
奈良女子高等師範學校敎授　木枝增一編

臨時國語調査會發表

漢字漢語假名遣整理案

東京
大阪
東洋圖書株式合資會社發兌

序

臨時國語調査會は大正十二年五月常用漢字表を發表して以來、順次假名遣改定案、外國語表記法、當字廢止案、字體整理案および漢語整理案等を發表した。これらの諸案はその性質こそたがいに異るものであるとしても、學習負擔の輕減を圖り國民生活の能率を增進せんとする目的に至てはまったく一致して居るのである。現在我邦における言語文章および文字がすこぶる複雜にして、しかも不規則不整頓であるがために、兒童生徒の學習負擔が歐米におけるものに比してはなはだしく過重なものであることはこゝにあらためて述べるまでもない。のみならず國民の生活について見てもこれがために能率が一般に低下して居ることもまたきわめて明な事實である。ゆえにこれを一日も

はやく救濟することはまさに國家の一大急務であるから、臨時國語調査會ははやくもこゝに見るところがあつて、以上の諸案を整理してこれを發表したのである。國民がもしこれらの諸案に賛同してひろくこれを慣用するようになつたならば、學習負擔の輕減を促すとともに生活の安定國力の充實の目的も自然に達成せられ、こゝにはじめて本邦文化の健全なる發展を期待し得るに至るであろう。

木枝君が今回以上の諸案を編成してこれを發刊し、社會の要求を滿たそうと計畫されたことはまことに時宜を得たものと信ずるので喜びのあまりこゝに一言を陳べる次第である。

昭和四年三月

保科孝一

序

明治三十五年四月文部省に國語調査委員會が設置されて以來、大正二年六月廢止に至る迄の間、同會が調査發表した業績は實に十七種の多きに達し、いづれも單行本として發行され、國語研究者の生きた指針となつてゐる。その後大正十年六月に至り再び臨時國語調査會が設置されて今日に至るまで約八ヶ年、その調査業績は漢字、假名遣、漢語の三方面を主として着々進捗し來つてゐるのである。しかしその業績の報告は官報誌上に於てなされてをるのみで、之を集輯した冊子が今日に於て未だ刊行されてゐなかつたのである。これは種々の意味に於て甚だ遺憾なことであつた。

論者口を開けばひとしく我が國語國字の、歐米先進國に比して複雜

であり學習に困難であつて、文化の進歩に著しい阻害を與へて居ることを說く。しかもその整理改良の方策は又ひとしく机上の空論に走つて、實現を去ること遠いのが常である。文部省の臨時國語調査會の整理案は、ある種の問題に就いては、兎角の議論も學者間に無いではないが、實行案としては確に空論でなくて、實際的方案なのである。この點に於て、我等國語に携るものは、初等教育といはず中等教育といはず高等教育といはず、まづこの案に就いて考察をめぐらさなければならないと思ふ。しかもその考察の必要は教育といふ限られた世界ばかりのことではない。

國民精神と國語の關係は今更贅する必要もないことである。我等日本國民としての國語愛は理論ではない。唯これをよりよき國語たらしめんとする時、整理も必要であれば、改良も必要なのである。愛は

旨目であると共に又眞理である。我等は國語愛に對してこの整理案を一つの眞理と認める。しかしこれが眞理の具現として實行に移されてゆくには十分の考察に作ふ認容が國民に課せられてゐるのである。その課題の一つを果すのが本書を編した主なる理由である。

本書を編するに當つては、余にとつては恩師である臨時國語調査會幹事保科孝一先生より序文並びに有益なる助言を賜つた。こゝに厚き感謝の意を捧ぐる次第である。

昭和四年三月

編者

臨時國語調査會發表

漢字漢語假名遣整理案　目次

四　當字の廢棄と外國語の寫し方

五　漢語の整理

目次終

臨時國語調査會發表

漢字漢語假名遣整理案

一　常用漢字及び略字

昨年十一月十六日に開かれた臨時國語調査會の總會は、主査委員會選定の常用漢字表一千九百六十三字を滿場一致を以て可決した。また主査委員會において以上の常用漢字中字形の複雜なものは捨て、その代りに簡易な字體を以てしようといふ意見があつたので、右樣の漢字を八十二字選出した。たとへば獻・辭・證・爐に對する献・辞・証・炉といふやうな類であるが、これも總會において可決された。しかるに、右八十二字に類推すべきものが他に澤山あるではないかとの意見が出た結果、なほそれにつ

いて調査するため、十五名の主査委員が會長から指名され、増田義一氏が委員長となり精査した末、さらに七十二字を加へることになり、これを議案として去る一日の總會が召集されたのである。同日の總會はまたこれを大多數で承認したから、簡易な字體は昨年十一月の總會で可決した八十二字と、合せて百五十四字が今後常用漢字表中の本字に代はるわけになる。勿論百五十四字に類推すべきものがまだ澤山あるのであるけれども、それらはしばらく字體整理の際に讓ることになつた。しかもこの字體の整理はとほからず著手される筈である。もし以上の百五十四字を本字として用ゐることになると、自然の結果として、「辨」「辯」が「弁」となり、「餘」「余」が「余」になるために、常用漢字の一千九百六十三字が一千九百六十一字になるわけである。また字體の變更に伴つて從來の部首部屬に異動を來すことになる。たとへば字典では火部で引いた「營」は字體が「営」に變つたため、火で引くことが出來ないから口部で引くやうに改めた。「點」は黒部で引いてゐたが、この字體が「点」に變つたのでこれを火部

で引くことにした。かやうな類例は十數字ある。

以上常用漢字の選定については、その材料を各種の方面から集めたのである。

（一）尋常小學校の各種教科書のなかに現はれてゐるもの、（二）各新聞社において最も普通に用ゐてゐる漢字、即ち大出張小出張と稱する漢字表、（三）築地活版所・秀英舍等の印刷所において最も普通に用ゐてゐるもの、（四）個人として常用漢字について研究されたもの等を材料として、だんだん研究を進めた。さうして、もつとも普通に使用されてゐてこれだけで國民生活上大體さしつかへないものと認めて決定したのが、今回の一千九百六十餘字である。世間では單に小學校を標準としたやうに考へてゐる人もあるが、單に小學校のみを標準としたのではない。既に述べたやうに種々の材料を集めて研究したものである。尤もこれまで小學校の教科書に用ゐられてゐる漢字は、すでに多年の間調査研究されて來たものであるから、これらの漢字は大體能率の高いものと認めてよいのであるから、今回の常用漢字の調査についてそれに

重きをおいたことは事實である。けれども、單に小學校の教科書に現れた文字のみで取捨したのではない。また一千九百六十餘字は小學校の教育のみを標準としてゐるのではない。廣く國民一般の生活上においても、まづ大體これだけあればさしつかへないといふ見込で決定されたものである。勿論今まで漢字を無制限に使つてゐた人から見れば當分は不便であるかも知れないけれども、ある程度までは假名で書くもさしつかへなく、またむづかしい漢語をどこまでも使用しなければならないといふことはないから、この點に多少の工風をすれば、まづ大體さしつかへないつもりでゐる。なほ常用漢字の圓滿な實行を期するには、當字や漢語の整理を行ふことも必要であるが、さらに一層急要なことは字音假名遣と國語假名遣を整理することである。つまり常用漢字を實行すると、これまで漢字に書いてゐたもので、今後假名書にする場合が澤山あるが、そのとき第一に突當る問題は假名遣であるから、これを發音的に整理することがもつとも緊要なことである　ゆゑに本會は今後これらの調査を急速に進める筈で、

すでにそれらの準備に著手してゐる。（臨時國語調査會幹事　保科孝一）

一　常用漢字表

凡　例

一、本表にない漢字は假名で書く。

二、固有名詞には本表にない文字を用ゐても差支ない。

たゞし外國（支那を除く）の人名地名は假名書きすること。

三、代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書く。

四、外來語は假名で書く。

（一）一　丁　七　丈　三　上　下　不　世　丙　並

（丨）中

（丶）丸主

（丿）久乏乘

（乙）乙九乞也乳亂

（亅）了事

（二）二云互五井

（亠）亡交京亭

（人）人仁仇今介仕他付仙代令以仰仲件任企

伊伏伐休伯伴伺似但位低住佐何余佛作

使來例侍供依侮侯侵便係促俊俗保俠信

修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健

側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價

儀億儉儒償優

（儿）元兄充兆兇先光兌免兒兎

（入）入內全兩

（八）八公六共兵具典兼

（冂）冊再

（冖）冠

（冫）冬涼准凌凍凝

（几）凡

（凵）凶凸凹出

（刀）刀刃分切刈刊刑列初判別利到制刷券刺
刻則削前剛副割創劇劍劑

（力）力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢
勤勳勵勸

（勹）勺　匆　包

（匕）化　北

（匚）匹　區

（十）十　千　升　午　半　卑　卒　卓　協　南　博

（卜）占

（卩）印　危　却　卵　卷　即　卿

（厂）厄　厘　厚　原

（厶）去　參

（又）及　友　反　叔　取　受　叛

（口）口　古　句　叫　召　可　叱　史　右　司　各　合　吉　同　名　后　吏
吐　向　君　吞　吟　否　含　呈　吸　吹　告　周　味　呼　命　和　咽
哀　品　員　哲　唐　唱　商　問　啓　善　喉　喜　喪　單　嗣　嘉　嘗

器噴嚴囑

（囗）囚四回因困固國圍園圓圖團

（土）土在地坂均坊坐坑坪垂型垣埋城域執培

基堀堂堅堤堪報場塔塗塚塵境墓塀增墨

墮壁壇壓壞

（士）士壯壹壽

（夊）夏

（夕）夕外多夜夢

（大）大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮

（女）女奴好如妃妊妙妨妹妻妾姉始姑姓委姦

姪姫姻姿威娘娯娠婚婦婿媒嫁嫉嫡嫌孃

（子）子字存孝季孤孫學

（宀）宅字守安完宗官定宛宜客宣室宮宰害宴
家容宿寄密富寒察寡寢實審寫寬寶

（寸）寸寺封射將專尉尊尋對導

（小）小少尙

（尢）就

（尸）尺尼尾屎局居屆屈屋展層履屬

（山）山岡岩岬岳岸峠峯島峽崇崎崩嶮

（巛）川州巡巢

（工）工左巧巨差

（己）己

（巾）市布帆希帖帝帥師席帳帶常帽幅幕幣

（干）干平年幸幹

（幺）幻幼幾
（广）床序底店府度座庫庭庶康廉廊廟廢廣廳
（廴）延廷建廻
（廾）弄弊
（弋）式
（弓）弓弔引弘弟弱張强彈
（彡）形彩彫影
（彳）役彼往征待律後徐徑徒得從御復循徵徽
德徹
（心）心必忌忍志忘忙忠快念忽怒思怠急性怨
怪怯恐恥恨恩恭息悅悔悟患悲悼情惑惜
惠惡惰惱想愁愉意愚愛感慈態慕慘慢慣

慨慮慰慶慾憂憐憚憲憶憾憤懇應懲懷懸
戀
（戈）成我戒戚戰戲戴
（戶）戶戾房所
（手）手才打托扱扶批承技抑投抗折抱抵押抽
拂拍拒拓拔拘拙招拜括拳拾持指振捌捕
捧捨掃授掌排掘掛採探控推接提揚換握
揭揮援損搖搜摘攜摩撫擇擊操擔據擬擴
攝
（支）支
（攴）收改攻放政故效敍敎敏救敗敢散敬敵敷
數整

（文）文
（斗）斗　料　斜
（斤）斤　斥　斬　新　斷
（方）方　施　旅　旋　族　旗
（旡）旣
（日）日　旦　旨　早　旬　旭　昇　昌　明　易　昔　星　春　昨　是　時　晚
晝　普　景　晴　晶　智　暇　暖　暗　暑　暮　暴　曆　曇　曜
（曰）曲　更　書　曹　曾　替　最　會
（月）月　有　朋　服　朕　朗　望　朝　期
（木）木　未　末　本　札　朱　机　朽　杉　李　材　村　杖　束　柿　杯　東
松　板　枕　林　枚　果　枝　枯　架　柄　某　染　柔　査　柩　柱　柳
栗　校　株　根　格　栽　桃　案　桐　桑　桶　梅　條　梨　梯　械　棄

棋棒棚棟森棺植楠業極榮構概樂樋樓標
樞模樣樹橋機橫檄檜檢櫻欄權
（欠）次欲款歎歌歎歐歡
（止）止正此步武歲歷歸
（歹）死歿殊殉殖殘
（殳）段殺殼殿毀
（毋）母每毒
（比）比
（毛）毛毫
（氏）氏民
（气）氣
（水）水氷永汁求汗汚江池決汽沈沒沖沙河沸

油治沼沿況泉泊法波泣泥注泰泳洋洗津
洪洲活派流浦浪浮浴海浸消涉液淑涙淡
淨淫深混淸淺添減渡溫測港渴游湖湧湯
源準溝溢溶溺滅滋滑滯滴滿漁漂漆漏演
漕漠漢漫漸潔潛潮澤激濁濃濕濟濫濱瀧
灌灣

（火）火灰災炊炎炭烈烏無焰然煉煎煮煙煤照
煩熊熟熱燃燈燒營燭爆爐

（爪）爪爭爲爵

（父）父

（片）片版牌牒

（牙）牙

（牛）牛牧物牲特犧
（犬）犬犯狀狂狐狩狹狼猛猫猶猿獄獨獲獵獸
獻
（玄）玄率
（玉）玉王玩珍珠班現球理琴
（瓜）瓜
（瓦）瓦瓶
（甘）甘甚
（生）生產甥
（用）用
（田）田由甲申男町界畏畑畔畜畝略番畫異畱
當疊

（疋）疋　疎　疏　疑

（疒）疫　疲　疾　病　症　痕　痘　痛　痢　療

（癶）登　發

（白）白　百　的　皆　皇

（皮）皮

（皿）皿　盆　益　盛　盜　盟　盡　監　盤

（目）目　盲　直　相　省　眉　看　眞　眠　眺　眼　着　睡　督　睦　瞭

（矢）矢　知　短

（石）石　砂　砲　破　研　硬　硯　碁　碎　碑　確　磁　磨　礎

（示）示　社　祈　祕　祖　祝　神　票　祭　禁　禍　福　禦　禮

（禾）秀　私　秋　科　秒　租　秤　秩　移　稅　程　稚　種　稱　稻　稼　稿
穀　積　穗　穩

（穴）穴究空穿突窃窒窗窮

（立）立章童端競

（竹）竹竿笑笛笠符第筆等筋筒答策箇算管篇

箱節範築篤簡簿籍

（米）米粉粒粘粗粟粹精糖糞

（糸）系紀約紅紋納純紗紙級紛素紡索紫累細

紳紹紺終組結絶絞絡給統絲絹經綠維綱

網綴綻綿緊緒線締緣編緩緯練縛縣縫縮

縱總績繁織繕繪繭繰繼纂續

（缶）缺

（网）罪置署罰罵罷羅

（羊）羊美羣義

（羽）羽 翁 翌 習 翼
（老）老 考 者
（而）耐
（耒）耕
（耳）耳 耽 聖 聘 聞 聯 聲 職 聽
（肉）肉 肋 肖 肝 股 肥 肩 肯 育 肴 肺 胃 背 胎 胞 胴 胸
能 脂 脇 脈 脊 脚 脱 腎 腐 腕 腦 腰 腸 腹 腺 膏 膚
膜 膝 膳 膽 臆 臟
（臣）臣 臥 臨
（自）自 臭
（至）至 致 臺
（臼）臼 與 舅 興 舉 舊

（舌）舌　舍

（舛）舞

（舟）舟　航　般　舵　舶　船　艇　艘　艦

（艮）良

（色）色

（艸）芋　芝　花　芽　芳　苑　苗　若　苦　英　茂　茶　草　荒　荷　莊　莖
菊　菌　菓　菜　華　萩　萬　落　葉　著　葬　蒔　蒙　蒸　蓄　蓮　蔓
蔭　薄　薦　薪　藍　藏　藝　藤　藥　蘇

（虍）虎　虐　處　虛　虜　號

（虫）蚊　蛇　蛙　蜂　蜜　融　蟲　蠶　蠻

（血）血　衆

（行）行　術　街　衝　衡　衞

(衣) 衣表衰袂袋袖被袴裁裂裏裕補裝裸製複
褒
(西) 西要覆
(見) 見規視親覺覽觀
(角) 角解觸
(言) 言訂計討訓託記訟訪設許訴診詐詔評詞
詠詣試詩詰話詳誅誇誌認誓誕誘語誠誤
誦說課誼調談請諒論諫諭諸諾謀謁謂謙
講謝謠謹證識譜警譯議護譽讀變讓
(谷) 谷
(豆) 豆豐
(豕) 豚象豪豫

（貝）貝貞負財貢貧貨販貫責貯貳貴買貸費貿
賀賃賄資賊賑賓賜賞賢賣賤賦質賴購贈
贊

（赤）赤赦

（走）走赴起超趣越

（足）足距跡路踊踏蹟蹴躍

（身）身

（車）車軌軍軒軟軸較載輔輕輝輩輪輸輿轉

（辛）辛辨辭辯

（辰）辰農

（辵）込辻迎近返迫迭述迷追退送逃逆透逐途
通速造逢連遁進逸遂遇遊運過道達達遙

遞遠遣適遭遲遷選遺避還邊
（邑）那邦邪邸郊郞郡部郵都鄉
（酉）酌配酒酢酬酷酸醉醜醫
（釆）釋
（里）里重野量
（金）金釜釘針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錄
錢錦鍋鍛鎌鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛
（長）長
（門）門閉開閏閑間閣閥關
（阜）防附降限陛院陣除陪陳陰陵陶陷陸陽隅
隆隊階隔隙際障隣隨險隱
（隹）隻雀雄雅集雇雌雙雜離難

（雨）雨雪雲零電雷需震霜霞霧露靈

（青）青靜

（非）非

（面）面

（革）革靴鞍

（音）音響

（頁）頂頃項順須頓預頑頒領頭頻題額顏願顚
類顧顯

（風）風

（飛）飛飜

（食）食飢飲飯飾養餓餘餅館饉

（首）首

(香)香

(馬)馬馳駁駄駐騎騰騒驅驕驗驚驛

(骨)骨髓體

(高)高

(髮)髮

(鬥)鬪

(鬼)鬼魂魔

(魚)魚鮮鯉鯛鰹

(鳥)鳥鳩鳴鶴鷄

(鹵)鹽

(鹿)鹿麗

(麥)麥

（麻）麻

（黃）黄

（黑）黒　默　點　黨

（鼓）鼓

（鼠）鼠

（鼻）鼻

（齊）斉　齋

（齒）歯　齡

（龍）竜

（龜）亀

（大正十二年五月九日官報三二三〇號附錄雜報六）

二　略字表

左の字體を本字として用ゐること。
（括弧内の小字は字典體）

勧（勸）　権（權）　潅（灌）　歓（歡）　観（觀）
沢（澤）　択（擇）　訳（譯）　駅（驛）　釈（釋）
変（變）　恋（戀）　蛮（蠻）　湾（灣）
茎（莖）　径（徑）　経（經）　軽（輕）
併（倂）　塀（塀）　瓶（甁）　餅（餠）　研（硏）
斉（齊）　斎（齋）　済（濟）　剤（劑）
残（殘）　浅（淺）　賎（賤）　銭（錢）
労（勞）　営（營）　栄（榮）　学（學）　覚（覺）

挙（擧） 誉（譽）
断（斷） 継（繼）
湿（濕） 顕（顯）
窓（窗） 総（總）
属（屬） 嘱（囑）
為（爲） 偽（僞）
帯（帶） 滞（滯）
参（參） 惨（慘）
両（兩） 満（滿）
発（發） 廃（廢）
鼡（鼠） 猟（獵）
乱（亂） 辞（辭）

歯（齒） 齢（齡）
潜（潛） 賛（贊）
赱（走） 徒（徒）
従（從） 縦（縱）
悩（惱） 脳（腦）
処（處） 拠（據）
担（擔） 胆（膽）
来（來） 麦（麥）
寿（壽） 鋳（鑄）
数（數） 楼（樓）
楽（樂） 薬（藥）

読（讀）　続（續）　虚（虛）　戯（戲）
竜（龍）　滝（瀧）　遅（遲）　觧（解）
随（隨）　髄（髓）　独（獨）　触（觸）
鹿（鹿）　麗（麗）　畳（疊）　摂（攝）
聴（聽）　廰（廳）　虫（蟲）　蚕（蠶）
仮（假）　円（圓）　叙（敍）　献（獻）
児（兒）　図（圖）　条（條）　画（畫）
刻（刻）　壱（壹）　様（樣）　当（當）
励（勵）　実（實）　帰（歸）　尽（盡）
営（營）　写（寫）　気（氣）　礼（禮）
国（國）　宝（寶）　炉（爐）　称（稱）
囲（圍）　扣（控）　犠（犧）　糸（絲）

欠（缺）　弁（辨）（辯）　霊（靈）　党（黨）
声（聲）　逓（遞）　余（餘）　亀（龜）
台（臺）　辺（邊）　舘（館）
旧（舊）　医（醫）　体（體）
万（萬）　鉄（鐵）　闘（鬭）
号（號）　関（關）　塩（鹽）
証（證）　双（雙）　点（點）
豊（豐）

（大正十二年五月十二日官報第三二三三號附錄雜報七）

二　漢字の字體整理

現今社會に行われている漢字には正字あり俗字あり訛字あり、その間にまた慣用字なるものがあつて、一字にして數體を有するもの少くない。しかもその取捨については人々の見るところかならずしも一致しない。これがためわが國民教育に實に甚しい禍を受けて居る。ゆえに文部省においてもこれを整理統一する必要を認め、大正五年七月本省に調査委員を設け、大正八年七月漢字整理案を發表したのである。ついで臨時國語調査會が大正十二年五月常用漢字一千九百六十二字を發表したが、その內乱、辞、証、炉、体、択、亀等の如き字畫の簡易な字體百五十四字を選定し、原字を捨ててこれを一般に慣用することゝした。しかるに常用漢字中字體の整理を要するものが他にも少くないので、全體に涉つて調査を進める必要を認めた結果、本會では先般來

その調査に着手し、この度いよ〳〵その成案を得たので、これを發表するに至つた。現今の如く種々の字體が並び行われて居ることは甚だ不便であるから、これを統一しようとゆうこと、漢字は字畫が複雜で學習上及び運用上頗る困難であるから、これを幾分なりとも便利なものにしたいとゆうことが字體を整理せんとする主要な目的であるから、その調査方針としては、まづ社會の慣用にもつとも重きを置き字體の簡易なものを採用することゝしたが、しかし運筆の便否や字形の釣合等にも深く考慮したことは言ふまでもない。この調査を進めるについては康熙字典を基準としたが、一千九百六十二字中右の方針によつて整理された字體が約一千〇二十字になる。尚整理の結果常用漢字中辨、辯が弁、餘、余が余となつたために二字を減じて一千九百六十字になるのである。わが國民は現今漢字の過重な負擔に苦んで居るのであるが、若し社會がさきに本會から發表した常用漢字表によつて漢字の制限を行い、今又本案による整理字體をひろく慣用する樣になつたならば、以上の負擔を輕減することが少くないと

信ずる。尚本會は常用漢字の圓滿なる實行を期するために今後漢字の運用と漢語の整理の調査にもつぱら力を注ぐ豫定である。（臨時國語調査會幹事　保科孝一）

字體整理案

凡例

一、本案ハ先キニ發表シタ常用漢字表ニツキ、ソノ字體ヲ整理シタモノデアル。

二、本案ハ康熙字典ノ字體ヲ本トシ、コレヲ整理スルニ當リ、現代ノ慣用ヲ深ク考慮シ、字畫ノ簡易ト運筆ノ便利トニ重キヲ置キ、字形ノ釣合ヲ整ヘ、小異ノ合同ヲ圖ツタモノデアル。

三、本案ニオケル字體ノ整理ニヨリ、部首ノ形ハ左ノ如ク變ル。

夊 广 幺 夂 戸 又 ム 八 入(新)

夊 广 幺 夂 戶 又 ム 八 入(旧)

片 父 爪 氏 殳 文 攵 支 户(新)

片 父 瓜 氏 殳 文 攴 支 戶(旧)

羽 糸 穴 示 疒 瓦 玄 廾 牙(新)

穴冠ノ時ハ

羽 糸 穴 示 疒 瓦 玄 廾 牙(旧)

耒　耳　至　舛　艮　衣　角　言　辵　辶

（偏ノ時ハ艮）

耒　耳　至　舛　艮　衣　角　言　走　辵

長　雨　青　革　音　食　骨　高　鹿　麦

（偏ノ時ハ飠）

長　雨　青　革　音　食　骨　高　鹿　麥

麻　黄　黒　鼠　鼻　斉　歯　竜　亀

麻　黃　黑　鼠　鼻　齊　齒　龍　龜

字体整理案

（大字ハ採用字体、小字ハ字典体、大字ノミノモノハ字典体ソノマヽノモノ。×二号表文字、*字典ニナイ文字。）

一部

一　丁　七　丈（丈）　三　上

下　不　世　丙（丙）　並（並　竝）

丨部

中

丶部

丸 丸丸 主

丿部

久 之 乘 乗

乙部

乙 九 乞 也 乳 乳 ×乱 亂乱

亅部

了 事 事吏

二部

二 云 互 五 井

亠部

亡 亡 交 交 京 京京 亭 亭

人部

人 仁 仇 今 今 介 仕

他 他佗 付 仙 仙僊 代 令 令 以

仰 仰
仲
件
任
企
伊

伏
伐
休
伯
伴 伴
伺

似
但
位
低 低
住
佐

何
余
佛
作
使 使
来 來

例
侍
供
依 依
侮 侮
侯 侯 矦

侵 侵
便 便 便
係 係
促
俊 俊
俗

保
俠
信 信
修 修 脩
俳
俵 俵

俸　併× 併 倂　倉 倉　個　倍 倍　倒

候 候 倏　借　倫　仮× 假　偉 偉　偏 偏

停 停　健 健　側　偶　傍　傑 傑

備 備　催　働×　傳　債　傷 傷

傾　僅 僅　像 像　僚　偽× 僞　僧 僧

價　儀　億 億　倹 儉　儒 儒　償

優

儿部

元 兄 充充 兆 兇 先

光 兑兌 免免 児×兒 兜兜兜

入部

入入 内內 全全 両×兩

八部

八八 公公 六 共 兵 具具

典 兼 兼

冂部

冊 冊冊 再

冖部

冠

冫部

冬 冬 冷 冷 涼 涼涼 准 准準 凌 凌 凍

凝

几部

凡

凵部

凶　凸　凹　出

刀部

刀　刃（刃）　分（分）　切　刈　刊

刑（刑　刑）　列　初　判（判）　別（別）　利

到（到）　制　刷　券（券）　刺（刺）　刻×（刻）

則　削（削）　前（前）　剛　副　割（割）

創（創）　劇　剣（劍　劒）　剤×（劑）

力部

力　功　加　劣　助　努

効　勅（勅　敕　勑）　勇（勇）　勉（勉）　動（動）　勘

務（務）　勝（勝）　労×（勞）　募（募）　勢（勢）　勤（勤）

勲（勳）　励×（勵）　勧×（勸）

勹部

勻　勻　匆*　包

匕部

化　北　北

匚部

匹　区　區

十部

十　千　升　午　半（半）　卑（卑）

卒　卓　協（協）　南　博（博）

卜部

占

卩部

印　危　却（却　卻）　卯　卷（巻）　即（即　卽）

卿（卿）

厂部

厄（厄　卮）　厘　厚　原

厶部

去　参×（参）

又部

及　友　反（反）　叔　取（取）　受（受）

叛（叛）

口部

口　古　句　叫　召　可

叱（叱）　史（史）　右　司　各　合

吉　同　名　后　吏（吏）　吐

向　君　吞　吟（吟）　否　含

呈（呈）　吸　吹　告（告）　周（周）　味

呼　命（命）　和　咽　哀（哀）　品（品）

員 員貟　哲　唐 唐　唱　商 啇　問

啓 啓　善 善　喉 喉　喜 喜　喪 喪　單 單

嗣　嘉　嘗 嘗甞　器 器噐　噴 噴　嚴 嚴

囑 囑嘱

囗部

囚　四 四　回 囘囬　因 因囙　困　固

国 國囯　囲 圍　園 園　円 圓　図 圖圗　團

土　坐　埋　堀　場　墓

場塲　墓

土部

土　在　坑　城　堂　塔　塀

在　城　塔　塀

地　坪　域　堅　塗　增

坪　增

坂　垂　執　堤　塚　墨

坂阪　垂埀　堤　塚　墨

均　型　培　堪　塵　墮

均　塵　墮

坊　垣　基　報　境　壁

報　境　壁

壇 壇　壓　壊 壞

士部

士　壮 壯　壱× 壹　寿× 壽

夂部

夏 夏

夕部

夕　外 外　多　夜 夜　夢 夢 梦

大部

大　天　太　夫　央　失

奇（奇）　奉　奏　契（契）　奔（奔）　奢（奢）

奥（奥）　奪　奬（弉　奬　奬）　奮

女部

女　奴　好　如　妃（妃）　妊（妊　姙）

妙（妙　玅）　妨　妹　妻　妾　姉（姉　姊）

始（始）　姑　姓　委　姦　姪（姪）

姫（姬）　姻　姿（姿）　威　娘（娘）　娯（娛）

娠（娠）　婚（婚　婚）　婦（婦）　婿（壻　壻）　媒　嫁

嫉（嫉）　嫡（嫡）　嫌（嫌）　嬢（孃）

子部

子　字　存　孝　季　孤（孤）

孫（孫）　又　学（學　斈）

宀部

宅　宇　守　安　完　宗

官　定（定）　宛　宜（宜）　客　宣

室（室）　宮　宰　害（害）　宴　家

容　宿（宿　宿）　寄（寄）　密　富（富　冨）　寒（寒）

察　寡　寢（寝）　×実（實）　審　写（×写　寫）

寛（寬）　×宝（寶　寳）

寸部

寸 寺 封 射 将將 專

尉 尊尊 尋尋 對 導導

小部

小 少 尚尙

尢部

就

尸部

尺 尺
尼 尼
尾 尾
屎 屎
局 局
居 居

届 届
屈 屈
屋 屋
展 展
層 層
履 履

×屬 属 屬

山部

山
岡 岡 岡
岩 岩 嵒 巖
岬
岳 岳 嶽
岸

*峠
峰 峰 峯
島 島 嶌 嶋
峽
崇
崎 崎

崩

崄 嶮

巛部

川

州

巡 巡

巣 巢

工部

工

左

巧

巨 巨

差 差

己部

己

巾部

市　布　帆　希　帖　帝 帝

師　師　席 席　帳 帳　×帯 帶　常

帽 帽　幅　幕 幕　幣 幣

干部

干　平 平　年 年　幸 幸　幹

幺部

幻 幻　幼 幼　幾 幾

广部

床 床 牀
序 序
底 底
店 店
府 府
度 度
座 座
庫 庫
庭 庭
庶 庶
康 康
廉 廉
廊 廊
廟 廟
廢 ×廃 廢
廣 廣
廳 ×廰 廳

廴部

延 延
廷 廷
建 建
廻 廻 迴

廾部

弄 弊 弊

弋部

式

弓部

弓 弔 引 弘 弘 弟 弱 弱

張 張 強 强 強 彈 彈

彡部

形　彩（彩）　彫（彫）　影

彳部

役（役）　彼　往　征　待　律

後　徐　×径（徑）　×徒（徒）　得　×従（從）

御（御）　復　循　微　徴（徵）　徳

徹（徹）

心部

心　必　忌 忌　忍 忍　志　忘 忘

忙 忙　忠　快　念 念　忽　怒

思　怠 怠　急 急　性　怨　怪

怯　恐 恐　恥 恥 耻　恨 恨　恩　恭 恭 恭

息　悦 悅　悔 悔　悟　患　悲

悼　情 情　惑 惑　惜　惠 惠　惡 惡

惰 惰　惱× 惱　想　愁　愉 愉　意 意

愚
惨× 慘
慶 慶
憶 憶
懐 懷

愛
慢
慾
憾 憾
懸 懸

感 感
慣
憂
憤 憤
恋× 戀 恋

慈
慨 慨
憐 憐
懇 懇

態 態
慮
憚 憚
応 應

慕 慕
慰
憲 憲
懲 懲

戈部

成 成
我
戒
戚
戦 戰
戯× 戲 戲

戴

戶部

戸 户
戻 戾
房 房
所 所

手部

手
扌
打
托
扱
扶

批
承
技 技
抑 抑
投 投
抗

折
抱 抱
抵 抵
押
抽
拂

拍拓
招
指指指
掃掃
採採
揚揚
損

拒拒
拜拜
振振
授
探探
換
搖搖

拓
括
捌捌
掌
接
握握
搜

拔拔
拳拳
捕
排
扣控
揭揭
摘摘

拘
拾
捧
掘
推
揮
携攜携攜携攜

拙
持
捨捨
掛掛
提提
援援
摩摩

撫
×択 擇
撃 擊
操 操
×担 擔
×拠 據

擬
擴 擴
×摂 攝

支部

支 支

攴部

収 收 收
改 改
攻
放
政
故

效
×叙 敍 敘
教 敎
敏 敏
救 救
敗

敢

散　散

敬　敬

敵　敵

數　數

数　數

整　整

文部

文　文

斗部

斗

料

斜　斜

斤部

斤　斤　斬　新　×断（斷　斷　斷）

方部

方　施　旅（旅）　旋　族　旗

无部

既（旣　既）

日部

日　旦　旨（旨）　早　旬　旭

昇　昌　明 明 明　易　昔　星

春　昨　是 是　時　晩 晩　晝

普　景　晴 晴　晶　智　暇

暖 暖　暗 暗　暑 暑　暮 暮　暴　曆 曆

曇 曇　曜 曜

曰部

曲　更 更 叓　書　曹　曾 會　替

最　會（會）

月部

月　有　朋　服（服）　朕（朕）　朗（朗）

望（朢）　朝（朝）　期

木部

木　未　末　本　札　朱

杌　朽　杉　李　材　村

杖（杖）　東　杯　東　松（松　柗）　板（板）

枕　林　枚　果　枝　枯

架　柿（柿　柹　柿）　柄　某（某）　染　柔

査（査）　柩　柱　柳（柳）　栗　校（校）

株　根（根）　格　栽　桃　案

桐　桑（桑）　桶　梅（梅）　×条（條）　梨

梯　械　棄　棋（棋　棊）　棒　棚

棟　森　棺　植（植）　楠　業

極（極）　栄×（榮）　構（構）　概（概）　楽×（樂）　樋（樋）

楼×（樓）　標　枢（樞）　模（模）　様（樣）　樹

橋（橋）　機（機）　横（橫）　檄　檜（檜）　検（檢）

櫻　欄（欄）　権×（權）

欠部

次（次）　欲　欵（欵　款）　欺　歌　歎（歎）

欧 歐　×歓 歡

止部

止　正　此　歩 步　武　歳 歲

歴 歷　×帰 歸 皈

歹部

死　歿 歿 殁　殊　殉　殖 殖　×残 殘

殳部

段
段

殺
殺

殼
殼

殿
殿

毀
毀

母
母部

每
每

毒

比
比部

毛
毛部

毫
毫

氏部

氏 氏

民 民

气部

×気 氣

水部

水

氷 氷 冰

永 永 永

汁

求

汗

汚 汚 汙

江

池

決 決 决

汽 汽

沈 沈 沉

沒 没　沖　沙　河　沸　油

治 治　沼　沿 沿　況 况 況　泉　泊

法 法　波　泣　泥　注　泰

泳　洋　洗　津　洪　洲

活　派 派　流 流　浦　浪 浪　浮 浮

浴 浴　海 海　浸 浸　消 消　涉 渉

淑　淚 涙　淡　淨 浄　淫 淫　深 深 深

混　温（温　溫）　湧（湧　涌）　溶　滴（滴）　演　潔（潔）

清（淸）　測　湯（湯）　溺（溺）　満×（滿）　漕　潜×（潛　濳）

浅×（淺）　港　源　滅　漁　漠（漠）　潮（潮）

添　渇（渴）　準（凖）　滋（滋）　漂　漢（漢）　沢×（澤）

減（减　減）　游（游　遊）　溝（溝）　滑（滑）　漆（漆　柒）　漫　激

渡（渡）　湖　溢（溢）　滞×（滯）　漏（漏）　漸　濁

濃（濃）
×湿（濕　溼）
×済（濟）
濫
濱（濱）
×滝（瀧）

×潅（灌）
×湾（灣）

火部

火
灰
災（災　灾）
炊
炎
炭

烈
烏
無
焔（焰　焔　燄）
然（然）
煉（煉）

煎（煎）
煮（煑）
煙（煙　烟）
煤
照
煩

熊（熊）
熟
熱（熱）
燃（燃）
燈
焼（燒）

営 營　燭　爆　炉 炉 爐

爪部

爪　争 爭　為 爲　爵 爵

父部

父 父

片部

片 片　版 版　牌 牌　牒 牒

牙部

牙（牙）

牛部

牛
牧
物
牲
特
×犧（犠）

犬部

犬
犯
状（狀）
狂
狐（狐）
狩
狹
狼（狼）
猛
猫（猫　猫）
猶（猶）
猿（猿）

獄 獄
×独 獨
獲 獲
×猟 獵
獣 獸
×献 献 獻

玄部

玄 玄
率 率

玉部

玉
王
玩
珍 珍 珎
珠
班

現
球
理
琴 琴

瓜部

瓜 瓜

瓦 瓦

瓦部

瓶 瓶 甁

甘

甘部

甚

生

生部

產 產

甥

用部

用

田部

田　由　甲　申　男　町

界　畏（畏畏）　×畑　畔（畔）　畜（畜）　畝（畒畝）

略　番　×画（画畫畵）　異（異）　×畄（畱留）　當

×疊（疊疉）

疋部

疋

疎

疏 疏

疑

疒部

疫 疫

疲 疲

疾 疾

病 病

症*

痕 痕

痘 痘

痛 痛

痢 痢

療 療

癶部

登

発× 發

白部

白 百 的 皆 皇

白

皮部

皮

皮

皿部

皿 盆 益 盛 盜 盟

皿

盆 益 盛 盗

尽 尽盡 監 盤 盤

目　看　睡　矢

目部

盲 旨　直 直　相　省　眉

眞 真 眞　眠 眠　眺　眼 眼　着 着

督　睦 睦　瞭

矢部

矢　知　短

石部

石

石　砂　砲（砲　礮）　破　×研（硏）　硬（硬）

硯　碁　碎　碑（碑　碑）　確（確）　磁

磨（磨）　礎

示部

示（示）　社（社）　祈（祈）　秘（祕　秘）　祖（祖）　祝（祝）

神（神）　票　祭　禁　禍（禍）　福（福）

禦（禦）　礼（×礼　禮）

禾部

秀　私　秋　科　秒　租

秤 秤　秩　移　税 稅　程 程　稚

種 種　称× 稱　稲 稻　稼　稿 稿　穀 穀 穀

積　穂　穏 穩

穴部

穴 穴　究 究　空 空　穿 穿　突 突　窃 竊

窒 窒

×窓 牕 牎 窓 窗 囱

窮 窮 窮

立部

立 章 童 童 端 競 競 竸 竸

竹部

竹 竿 笑 笛 笠 符

第 筆 等 筋 筒 答 答 荅

策 策 箇 筭 筭 算 管 篇 篇 箱

節 節

範

築 築

篤

簡 簡

簿 簿

籍 籍

米部

米

粉 粉

粒

粘

粗

粟

粹

精 精

糖 糖

糞

糸部

系 系

紀 紀

約 約

紅

紋 紋

納 納

縁　綻　経×　絞　紹　紡　純

緣　綻　經　絞

編　綿　緑　絡　紺　索　紗

編　綠

緩　緊　維　給　終　紫　紙

緩　緊　終　紙

緯　緒　綱　統　組　累　級

緯　緒　統

練　線　網　糸×　結　細　紛

練　網　絲　紛

縛　締　綴　絹　絶　紳　素

縛　締　綴　絹　絕

縣　縣

縫　縫

縮

×縦　縱

×総　總　総

績

繁　繁

織　織

繕　繕

繪　繪

繭　繭

繰　繰

×継　繼

纂

×続　續

缶部

×欠　缺

网部

罪

置　置

罰　罰

署　署

罵

罷　罷

羅

羊部

羊
美
群 群 羣
義

羽部

羽 羽
翁 翁
翌 翋
習 習
翼 翼

老部

老
考 考 攷
者 者

而部

耐

耒部

耕 耕

耳部

耳 耳

耽

聖 聖

聘

聞 聞

聯 聯

声 聲声

職 職

聽 聴 聽

肉部

肉　肩　背　脂　腎　腹

（肩　背　脂　腎）

肋　肯　胎　脇　腐　×腺

（肯　胎　脇・脅　腐）

肖　育　胞　脈　腕　膏

（肖　育・育　脈・脉　膏）

肝　肴　胴　×脊　脳　膚

（肴　脊　腦　膚）

股　肺　胸　脚　腰　膜

（股　肺　胸・胷　膜）

肥　胃　能　脱　腸　膝

（胃　能　脫　腸・腸　膝・膝）

膳

膳

胆 ×

膽

臆

臆

臓

臟

臣

臣部

臥

臨

臨

自

自部

臭

臭

至

至部

致

致

台

台 ×

臺

臺

臼部

臼　与（與与）　舅　興　挙×（擧　擧）　旧×（舊）

舌部

舌　舎（舍）

舛部

舞（舞）

舟部

舟

航 航

般 般

舵 舵

舶 舶

船 船 舩

艇 艇

艘 艘

艦 艦

艮部

良 良

色部

色

艸部

芋 芋　芝 芝　花 花　芽 芽　芳 芳　苑 苑

苗 苗　若 若　苦 苦　英 英　茂 茂　茶 茶

草 草　荒 荒　荷 荷　莊 莊　×茎 莖　菊 菊

菌 菌　菓 菓　菜 菜　華 華　荻 荻　万 ×万 萬

落 落　葉 葉　著 著　葬 葬 塟　蒔 蒔　蒙 蒙

蒸 蒸　蓄 蓄　蓮 蓮　蔓 蔓　蔭 蔭　薄 薄

薦 薦　薪 薪　藍 藍　藏 藏　藝 藝　藤 藤

薬× 藥
蘇 蘇

虎

虍部

虐 虐
処× 処 處
虚× 虛 虚
虜 虜
号× 号 號

虫部

蚊 蚊
蛇
蛙
蜂
蜜
融 融

虫× 蟲
蚕× 蠶 蠶
蛮× 蠻 蛮

血部

血
衆 衆 眾

行部
行
術 術
街
衝 衝
衡
衛 衛 衞

衣部
衣 衣
表 表
衰 衰
袂
袋 袋
袖

被
袴
裁 裁
裂 裂
裏 裏
裕 裕

補
裝 裝
裸
製 製
複
褒 襃 褎

西部

西　西
要
覆　覆

見部

見
規
視　視
親　親
覚× 覺
覧　覽　覽
観× 觀

角部

角　角
觧　觧× 解
触　触× 觸

言部

言 言　訂 訂　計 計　討 討　訓 訓　託 託

記 記　訟 訟　訪 訪　設 設　許 許　訴 訴

診 診　詐 詐　詔 詔　評 評　詞 詞　詠 詠

詣 詣　試 試　詩 詩　詰 詰　話 話　詳 詳

誅 誅　誇 誇　誌 誌　認 認　誓 誓　誕 誕

誘 誘　語 語　誠 誠　誤 誤　誦 誦　說 說

課（課） 誼（誼 誼） 調（調） 談（談） 請（請） 諒（諒）

論（論） 諫（諫） 諭（諭） 諸（諸） 諾（諾） 謀（謀）

謁（謁） 謂（謂） 謙（謙） 講（講） 謝（謝） 謡（謠）

謹（謹） ×証（證） 識（識） 譜（譜） 警（警） ×訳（訳 譯）

議（議） 護（護） ×誉（誉 譽） ×読（讀） ×変（變） 譲（讓）

谷部

谷

豆部

豆　豊×（豐）

豕部

豚　象（象）（𧰼）　豪（豪）　豫（豫）

貝部

貝　貞　負（負）　財　貢　貧（貧）

貨　販（販）　貫　責　貯　弐（貳）

貴　買　貸　費　貿（貿）　賀

貨　賄（賄）　資（資）　賊　賑（賑）　賓（賓　賓）

賜　賞　賢　賣　×賤（賤）　賦

質　賴（頼）　購（購）　贈（贈）　×贊（賛　贊）

赤部

赤　赦

走部

走

走×　走
赴　赴
起　起
超　超
越　越
趣　趣

足部

足
距　距
跡
路
踊
踏

蹟
蹴
躍　躍

身部

身

車部

車

軌 軌

軍

軒

軟 軟 輭

軸

較 較

載

輔

軽× 輕

輝

輩

輪

輸 輸

輿

轉

辛部

辛

弁 辨 弁×

辞× 辭 辤 辭

弁 辯 弁×

辰部

辱 辱

農 農

辵部

込*
辻*
迎 迎
近 近
返 返
迫 迫

迭 迭
述 述
迷 迷
追 追
退 退
送 送

逃 逃 迯
逆 逆
透 透
逐 逐
途 途
通 通

速 速
造 造
逢 逢
連 連
週 週
進 進

逸 逸
遂 遂
遇 遇
遊 遊
運 運
過 過

道 道
達 達
違 違
遙 遙
遞× 遞 遞
遠 遠

遣（遣）　適（適）　遭（遭）　遲×（遲 遲）　遷（遷）　選（選）

遺（遺）　避（避）　還（還）　辺×（邊）

邑（部）

那（那）　邦（邦）　邪（邪）　邸（邸）　郊　郎（郎）

郡　部　郵（郵 郵）　都（都）　郷（鄉）

酉（部）

酌（酌）　配（配）　酒　酢　酬　酷（酷）

酸（酸）
醉
醜
医×（醫）

采部
釈×（釋）

里部
里
重（重）
野
量

金部
金
釘
釜（釜）
針
釣
鈍

鈴　鈴
鉛　鉛
鉢
銀　銀
銃　銃
銅

銘
鋭　銳
鋒
鋼
録　錄
銭× 錢

錦
鍋　鍋
鍛　鍛
鎌　鎌
鎖　鎖
鎮　鎭　鎮

鏡　鏡
鐘　鐘
鉄× 鐵
鋳× 鑄
鑑　鑒　鑑　鑒
鑛　鑛

長部

長　長

門部

門　閉　開　閏　閑　間
間　間

閣　閲　関
閲
関　關

阜部

防　附　降　限　陛　院
降　限　陛

陣　除　陪　陰　陳　陵
陰　陰　陵

陶　陥　陸　陽　隅　隆
陥　陸　陽　隆

隊　階　隔　隙　際　障
隊　隔　隙　隙　障

隣 隣　随× 隨　険 險　隠 隱

隹部

隻 隻　雀　雄　雅 雅　集　雇 雇

雖　双× 双雙　雑 雜 雜　離　難 難

雨部

雨 雨　雪 雪　雲 雲　零 零　雷 雷　電 電

需 需　震 震　霜 霜　霞 霞　霧 霧　露 露

×霊 靈

青部

青 青

靜 靜

非部

非

面部

面

革部

革 革

靴 靴

鞍 鞍

音部

音 音

響 響

頁部

頂 頃 項 順 須 頓

預 頑 頒 頒 領 領 頭 頻 頻

題
題
顧
顧
額
顯
顯
顏
顏
願
顛
顚
顛
類
類
类

風部

風

飛部

飛
飜

食部

食　食
飢　飢
飲　飲
飯　飯
飾　飾
養　養

餓　餓
×余　余餘
餅　×餅餠
館　×舘館
饉　饉

首

首部

香

香部

馬部

馬

騰
騰

駅×
驛

骨
骨

高
高

馳 騒

骨部

髄×
髓
髓

高部

駁
駁

駆
驅
駈

体×
體
体

駄
駄

驕
驕

駐

験
驗

騎
騎

驚
驚

髟部

髮
髮

門部

鬪×
鬪
鬭

鬼部

鬼

魂
魂
䰟

魔
魔
魔

魚部

魚部
鮮
鯉
鯛 鯛
鰹

鳥部
鳥
鳩
鳴
鶴 鶴
鷄 鷄 雞

鹵部
鹵
塩× 鹽 ⿰土⿱鹵皿

鹿部
鹿
麻 鹿 麻×
⿱丽麻 麗 ⿱丽麻×

麥部

麦×
麦麥

麻部

麻
麻

黃部

黄
黃

黑部

黒　黒

黙　默　嘿

×点　點

×党　黨

鼓部

鼓　鼓　鼔　皷

鼠部

×鼡　鼠

鼻部

鼻　鼻

齊部

×斉　齊

×斎　齋

齒部

×歯　齒

×齢　齡

龍部

×竜　龍

龜部

×亀　龜

（大正十五年七月七日官報四一六一號附錄雜報一五四）

三　假名遣改定案

一　改定の主旨

昨大正十三年十二月二十四日文部省で開かれた臨時國語調査會は、滿場一致假名遣改定案を可決した。

假名遣の改定は國語假名遣字音假名遣の兩者にわたつているが、その改定の主旨は臨時國語調査會の發表した假名遣改定案のはじめにある左記の文で明らかである。

現今わが國に行われている國語および字音の假名遣は、これを學ぶのに一方ならぬ苦心を要し、しかもあやまりなくつかいこなすことがなか〳〵困難である。わが國民は、すでに漢字に苦しんでいるのに、そのうえ、むずかしい假名遣さゆう重荷

を負うている。本會がさきに常用漢字を公にし、さらにまた假名遣の整理をはかつて、この改定案を發表するのは、文字の使用を容易にして國民教育の發達と國家文運の進展を促そうとするためである。

右にも述べてある如く、國語および字音の假名遣をあやまりなくつかいこなすということは、よほどむずかしいのであつて、教育者も被教育者もこの點についてはつねに多大の苦痛を體驗して來ているのである。しかも從來の假名遣は、その標準が或過去の時代の言葉の書きあらわし方におかれており、その過去の時代の言葉の書きあらわし方は、それらの時代の發音を基礎としているのであるから、發音の習慣の變つて來ている後世の人々が、昔と同じやうに言葉を書きあらわそうとしたところで、それは相當な苦心を重ね練習を積んだ上でなければ不可能である。器械的に昔の人々の書きあらわし方を覺えこみ、いわゆる假名遣の規則を暗記しているのでなければ、その目的を達することが出來ない。文字を知り假名を知つていても、假名遣の規則に縛ら

れて言葉を書きあらわすに不便を感じ、しかも、その規則を覺えこむには多大の苦心を要するとゆうことは、いかにも不合理であるといわなければならぬ。現代の言葉の書きあらわし方はよろしく現代の發音の上に標準をもとめるべきである。文字を知り假名を知り簡單な表記の通則を心得てさえいれば、どんなことでも自分の書こうとすることが書けるとゆうようにならなければ、教育上の效果も十分にあらわれないし、國民の精神上の負擔も輕くならない。便不便とか、利不利とかゆうような實際問題をはなれて、單に學術上ばかりから考えて見ても、言語と文字、言葉と書きあらわし方との關係はそうゆう風でなければならぬのである。假名遣の改定が、教育上社會上の問題として取扱われるようになつたのは久しい以前からのことであるが、臨時國語調査會が、その成立の當初から、特にこの假名遣の調査整理を重要な事項の一と認め、愼重審議の末ここに具體案を發表して、長い間の懸案を解決するに至つたのは、國家社會のために同慶の次第である。

二　整理の方針および適用の範圍

臨時國語調査會が假名遣改定案を作成するに當つて、どうゆう方針によつたか、また改定假名遣がいかなる範圍に適用されるかは、次の凡例に明らかである。

凡　例

一、本案は大體東京語の發音により、なを地方におけるものをも考慮して整理したのである。

二、本案は主として現代文（口語、文語とも）に適用する。

三、固有名詞およびその他特殊な事情のあるものは、しばらく従前の通さする。ただしなるべく本案の假名遣による。

四、外國語の表記は別に定める。

現代の假名遣は、よろしく現代の言葉の發音に本ずいて定められるべきものである

ここは前に述べた通りである。しかし、現代の發音を標準とするにしてもいづれの地方の發音を標準とするかが問題となるが、本案では大體東京語の發音を標準としているのである。たとえば「菓子」「煉瓦」の如き、地方によつては「くわし」「れんぐわ」と發音するところもあるが、東京では「かし」「れんが」と發音するのが常である。すなわち東京語では くわ ぐわ が か が に發音されるから、それを標準にすれば字音假名遣改定案第二條の通り、「くわ ぐわ は か が に改める」とゆうことになつて來る。しかも、それが東京語だけにおける發音であるとすれば考慮の餘地もあるが、くわ ぐわ と か が とを區別して發音する地方と區別しない地方とは、これを全國的に見てほとんど相半するとゆう有様であるから、そうゆう地方的發音をも參考すると、右のような改定は、一そう理由の強いものとなるのである。他の種々の點の改定についても同様な注意が拂われてゐることは言うまでもない。

改定假名遣の適用範圍が現代文のすべてに及ぶべきのは當然である。口語と文語と

で假名遣がちがうとゆうような不統一は許さるべきでない。現代文でないもの、古文とか中古文とかゆう類のものを適用範圍外においているのは、それ等は過去の約束の下に書かれているので、強いてこれを現代の假名遣で律するには及ばないからである。凡例三の固有名詞およびその他特殊な事情のあるものとゆうのは、人名船舶名などの類や法令關係のもので容易に改められないものなどを含んでいる。外國語の發音の書きあらわし方は國語字音の假名遣と同樣に取扱うことの出來ないものが少くないから、表記の通則以外の細目は別に規定することとなつてゐる。

三　國語の表記に關する通則

國語の表記に關する通則は、表記上の大體の規則を示したもので、その條文は左の如くである。

第一條　國語の拗音を書くにはや、ゆ、よを右側下に細書する。

たゞし特別の場合にかぎり細書せずとも差支ない。

第二條　國語の促音を書くにはつを右側下に細書する。

たゞし特別の場合にかぎり細書せずとも差支ない。

第三條　國語のア列長音はア列の假名にあをつけて書く。

第四條　國語のイ列長音はイ列の假名にいをつけて書く。

第五條　國語のウ列長音はウ列の假名にうをつけて書く。

第六條　國語のエ列長音はエ列の假名にいをつけて書く。

第七條　國語のオ列長音はオ列の假名にうをつけて書く。

第八條　國語のア列拗音の長音はア列拗音の假名にあをつけて書く。

第九條　國語のウ列拗音の長音はウ列拗音の假名にうをつけて書く。

第十條　國語のオ列拗音の長音はオ列拗音の假名にうをつけて書く。

注意一　外國語の拗音促音の書き方には通則第一條第二條を適用する。

注意二　外國語の長音は通則第三條以下の場合の「あ」「い」「う」のかわりに「ー」をつけて書く。

右の通則のうちで注意すべき點は、長音の表記に あ い う の三つを用いる方法を採用したことである。長音を書きあらわすのに長音符（引音符）ーを用いるのも一つの方法であり、あ い う え お の五つを用ひるのも一つの方法であるが、臨時國語調査會では、その長短得失を審議して、前記の方法を採用することにしたわけである。

（大正十四年一月二十八日官報第三七二八號附錄雜報八二）

四　國語假名遣改定案

第一　ゐ、ゑ、を は い、え、お に改める。たゞし助詞の を を除く。

例

一　ゐ を い に改めるもの

いど（井戸）いのしゝ（猪）くわい（慈姑）まいる（參る）いる（居る）

二　ゑをえに改めるもの

こえ（聲）つえ（杖）すえ（末）うえる（植ゑる）すえる（据ゑる）

たゞし、酔ふ（ゑふ）はように改める。

三　ををおに改める。

おけ（桶）おか（岡）うお（魚）おどる（踊る）おしえる（教へる）

しおれる（萎れる）おかしい（をかしい）おしい（惜しい）あおい（青い）

第二　ぢ、づはじ、ずに改める。

例

一　ぢをじに改めるもの

くじら（鯨）ふじ（藤）わらじ（草鞋）ねじる（捻ぢる）はじる（恥ぢる）

よじる

二　づ を ず に改めるもの

うずら（鶉）うず（渦）みず（水）ゆずる（讓る）うずめる（埋める）

さずける（授ける）めずらしい（珍らしい）はずかしい（恥かしい）

しずかに（靜かに）まず（先）

第三　わ に發音される は は わ に改める。たゞし助詞のはを除く。

例

かわら（瓦）かわ（河）にわ（庭）あらわす（著す）まわる（廻る）

こわれる（毀れる）あらわぬ（洗はぬ）きらわぬ（嫌はぬ）

さそわぬ（誘はぬ）かわいらしい（かはいらしい）くわしい（委しい）

けわしい（險しい）にわかに（俄かに）すなわち（則）

第四　い に發音される ひ は い に改める。

例

うぐいす（鶯）たい（鯛）はい（灰）ついやす（費す）たいらげる（平げる）
ならいます（習ひます）わらいます（笑ひます）まいます（舞ひます）
ちいさい（小さい）こいしい（戀しい）ついに（遂に）

第五　おに發音されるふはおに改める。

例

あおい（葵）あおる（煽る）あおぐ（仰ぐ）たおす（倒す）

第六　うに發音されるふはうに改める。

例

あらう（洗ふ）まう（舞ふ）やとう（傭ふ）あやうい（危い）

第七　えに發音されるへはえに改める。

たゞし助詞のへを除く。

例

かえる（蛙）いえ（家）まえ（前）かえる（歸る）さえずる（囀る）
さそえ（誘へ）ひろえ（拾へ）さえ（助詞、さへ）

第八　おに發音されるほはおに改める。

例

いきおい（勢）かお（顔）しお（鹽）なおす（直す）におう（匂ふ）なお（猶）

第九　○ウ列長音に發音されるくふ、すふ、ぬふ、ぶふ、ゆふ、るふの類のふはうに改める。

例

くう（食ふ）すう（吸ふ）ぬう（縫ふ）おぶう（負ふ）ゆう（結ふ）
くるう（狂ふ）ゆうだち（夕立）

○たゞしユ○の長音に發音されるいふ（言）はゆうに改める。

第十　○オ列長音に發音されるおふ、そふ、のふ、もふ、よふ、ろふの類のふはう

に改める。

例

うけおう（請負ふ）あらそう（爭ふ）きのう（昨日）おもう（思ふ）

まよう（迷ふ）ふくろう（梟）

第十一　オの長音に發音される　はう、オ列長音に發音される　わう、あふ、おほ　は

おうに改める。

例

一　はう　を　おうに改めるもの

あおう（逢はう）かおう（買はう）まおう（舞はう）

こおう（强う）しおう（吝う）

二　わう　を　おうに改めるもの

よおう（弱う）

三　あふ を おう に改めるもの

おうぎ（扇《アフギ》）　おうち（楝《アフチ》）

四　おほ を おう に改めるもの

おうかみ（狼《オホカミ》）　おうやけ（公《オホヤケ》）　しおうせる（爲遂《シオホ》せる）

おうい（多《オホ》い）　おうきい（大《オホ》きい）

第十二　オ列長音に發音される かう、こほ は、こう に、がう は、ごう に改める。

例

一　かう を こう に改めるもの

こうがい（笄《カウガイ》）　こうじ（麴《カウヂ》）　こうべ（神戸《カウベ》）　さこう（咲かう）

きこう（聞かう）　こうばしい（かうばしい）

あこう（赤《アカ》う）　ちこう（近《チカ》う）　こう（斯《カ》う）

二　こほ を こう に改めるもの

こうり（氷）こうろぎ（蟋斯）とゞこうる（滯る）

三　がう を ごう に改めるもの

いそごう（急がう）なごう（長う）

第十三　オ列長音に發音される さう は そう に改める。

例

はなそう（話さう）かえそう（返さう）ちらそう（散らさう）

あそう（淺う）くそう（臭う）そう（然）

第十四　オ列長音に發音される たう、とほ、とを は とう に改める。

例

一　たう を とう に改めるもの

とうげ（峠）たとうがみ（疊紙）うとう（打たう）かとう（勝たう）

たとう（立たう）いとう（痛う）かとう（堅う）つめとう（冷たう）

二　とほ を とう に改めるもの
とうる（通《トホ》る）　とうい（遠《トホ》い）

三　とを を とう に改めるもの
とう（十《トヲ》）

第十五　オ°列長音に發音される なう は のう に改める。

例

しのう（死なう）　あぶのう（あぶなう）

第十六　オ°列長音に發音される はう、はふ、ほほ は ほう に、ばう は ぼう に、ぱう は ぽう に改める。

例

一　はう を ほう に改めるもの
ほうき（箒《ハウキ》）　ほうむる（葬《ハウム》る）

二　はふ を ほう に改めるもの

ほうる（投《ハフ》る）

三　ほほ を ほう に改めるもの

ほうずき（酸漿《ホホヅキ》）ほう（頰《ホホ》）ほうのき（朴木《ホホノキ》）

四　ばう を ぼう に改めるもの

あそぼう（遊ばう）とぼう（飛ばう）はこぼう（運ばう）

五　ぱう を ぽう に改めるもの

すつぽう（すつぱう酸）

第十七　オ列長音に發音される まう、まふ は もう に改める。

例

一　まう を もう に改めるもの

もうける（儲《マウ》ける）もうす（申《マウ》す）あゆもう（歩まう）やすもう（休まう）

たのもう（頼まう）あもう（甘う）せもう（狹まう）

二　まふ　を　もう　に改めるもの

すもう（角力）

第十八　オ列長音に發音される　やう、よほ　は　よう　に改める。

例

一　やう　を　よう　に改めるもの

ようか（八日）はよう（早う）ようやく（漸く）

二　よほ　を　ように改めるもの

もようす（催す）

第十九　オ列長音に發音される　らう　は　ろう　に改める。

例

いのろう（祈らう）かえろう（歸らう）とうろう（通らう）

くろう（暗う）かろう（辛う）あろう（粗う）

第二十　ウ列拗音の長音に發音される　きう　は　きゅう　に改める。

例

おうきゅう（大きう）

第二十一　ウ列拗音の長音に發音される　しう　は　しゅう　に改める。

例

しゅうと（舅）しゅうとめ（姑）あたらしゅう（新しう）

かなしゅう（悲しう）すゞしゅう（涼しう）

第二十二　オ列拗音の長音に發音される　けふ　は　きょう　に改める。

例

きょう（今日）

第二十三　オ列拗音の長音に發音される　せう　は　しょう　に改める。

例

まいりましょう（參りませう）そうでしょう（そうでせう）

右の改定は主として發音通りに書きあらわすことを目的とし、またその主旨の徹底を期したものであるから、たゞ二三の點だけについて説明を加えておく。

助詞のを、は、へを除外して、この三つだけをもとの假名遣通りに書くことにしたのは、不徹底の嫌はあるが、この三つの助詞だけは、一般の人々との親しみのことに深いもので、これをお、わ、えと書くと奇異の感じをいだく人が多いから、急激な變化を避ける意味で、これだけを除外例としたのである。

ゐ　ゑ、を（助詞をを除く）をい、え、おと書くことに改めたのは、現代の標準的發音では、ゐ、い　ゑ、え、を、おの區別が失われて、すべてい、え、おに發音されるようになつてゐるからである。助詞のをに除外例を認めたのも、助詞のをがもとのまゝに發音されてゐるからとゆうのではない。

ぢ、づ、を、じ、ずに改めることにしたのも、これを全國的に見て、ぢ、じ、づ、ずを區別して發音する地方とじ、ずに發音する地方とが相半していてしかも東京語ではそれがじ、ずの發音になつているからである。もつとも、東京語の發音については學者の間に異論もあるけれども、統一上からじ、ずの方に一定することになつたのである。

（大正十四年二月十八日官報三七四五號附錄雜報八四）

五　字音の表記に關する通則

字音の表記に關する通則も、大體において國語の表記に關するものと同樣ではあるが、兩者の間に幾分かの出入もあるから、全文を次にかゝげる。

第一條　字音の拗音を書くには や、ゆ、よ を右側下に細書する。

たゞし特別の場合にかぎり細書せずとも差支ない。

第二條　字音の促音を書くには つ を右側下に細書する。

ただし特別の場合にかぎり細書せずとも差支ない。

第三條　字音のウ列長音はウ列の假名にうをつけて書く。

第四條　字音のオ列長音はオ列の假名にうをつけて書く。

第五條　字音のウ列拗音の長音はウ列拗音の假名にうをつけて書く。

第六條　字音のオ列拗音の長音はオ列拗音の假名にうをつけて書く。

第七條　左の如き語は發音のまゝに書く。

銀杏	ぎんなん	大皇	てんのう	三位	さんみ
法被	はつぴ	十方	じつぽう	一邊	いつぺん
七寶	しつぽう	北方	ほつぽう	六本	ろつぽん
學校	がつこう	脚氣	かつけ	甲冑	かつちゆう
法度	はつと	雜貨	ざつか	立派	りつぱ

右のうちで特に注意すべきものは第七條の規定である。「銀杏」「天皇」はまさしく

「ぎんなん」「てんのう」と發音されるのに、「杏」の音が「あん」「皇」の音が「おう」(從來の字音假名遣にしたがえば「わう」)であるからといふので、これを「ぎんあん」「てんおう」と書くが如きは不合理でもあり無意味でもある。これらは、よろしく發音のまゝに「ぎんなん」「てんのう」の如く書くのがよい。本條の精神はそこにあるのである。

六　字音假名遣改定案

字音假名遣改定案の本文は左の如くである。

第一　ゐ、ゑ、をは　い、え、お　に改める。

例

一　ゐをいに改めるもの

胃　威　位　遺　委　尉

域　員　院　韻

水　炊　衰　推　對　遺　類

二　ゐをえに改めるもの

會　惠　囘　衞

越　猿　園　圓　苑　援　寃

三　ををおに改めるもの

汚　惡　嗚

翁

屋　温　穩　園　遠　怨

第二　くわ、ぐわはかがに改める。

例

一　くわをかに改めるもの

化　貨　果　菓　過　科　火　課

會　悔　壞　回　怪　快　獲　擴

活　猾　歡　官　還　貫

二　ぐわをがに改めるもの

臥　瓦

外　月　元　丸　願

第三　ぢ、づはじ、ずに改める。

例

一　ぢをじに改めるもの

持　痔

軸　舳　陣

女　除　重　住　頭

二　づをずに改めるもの

　豆　頭　途　圖

第四　わに發音されるははわに改める。

　例

　琵琶の琶　枇杷の杷

第五　ユの長音に發音されるいう、いふはゆうに改める。

　例

一　いうをゆうに改めるもの

　尤　又　友　幽　郵　誘　由　有　遊

　悠　憂　猶

二　いふをゆうに改めるもの

　邑　揖

第六　オ列長音に發音される　あう、わう、あふ、おふ　は　おう　に改める。

例

一　あう　を　おう　に改めるもの

　　鶯　櫻　鸚　央　奥

二　わう　を　おう　に改めるもの

　　往　王　旺　皇　凰　黄　横

三　あふ　を　おう　に改めるもの

　　凹　押　鴨

四　おふ　を　おう　に改めるもの

　　凹

第七　オ列長音に發音される　かう、くゎう、かふ、こふ　は　こう　に、がう、ぐゎう　がふ、ごふ　は　ごう　に改める。

例

一　かうをこうに改めるもの

好　考　向　肴　香　講　高　慷　航

幸　効　江　降　校　行

二　くわうをこうに改めるもの

宏　紘　光　廣　黃　皇　惶　荒

三　かふをこうに改めるもの

甲　岬　閤

四　こふをこうに改めるもの

劫

五　がうをごうに改めるもの

號　鄕　强　豪　傲

六　ぐわうをごうに改めるもの
　　轟
七　がふをごうに改めるもの
　　合
八　ごふをごうに改めるもの
　　劫　業
第八　オ列長音に發音されるさう、さふはそうに、ざう、ざふはぞうに改める。
　　　例
一　さうをそうに改めるもの
　　掃　双　爪　早　相　倉　曹　壯　操
　　騷　爭　桑　喪　葬
二　さふをそうに改めるもの

挿

三　ざうをぞうに改めるもの

造　藏　象　像

四　ざふをぞうに改めるもの

雜

第九　オ列長音に發音される　たう、たふ　は　とうに、だう、だふ　は　どうに改める。

例

一　たうをとうに改めるもの

刀　島　討　盗　打　橙　糖　當　湯　桃

陶　稻　禱　悼

二　たふをとうに改めるもの

答　塔　踏　納

三　だうをざうに改めるもの

道　堂　棠　萄

四　だふをざうに改めるもの

納

第十　オ列長音に發音されるなう、なふはのうに改める。

例

一　なうをのうに改めるもの

腦　惱　囊

二　なふをのうに改めるもの

納

第十一　オ列長音に發音されるはう、はふ、ほふはほうに、ばう、ばふ、ぼふはぼうに改める。

例

一　はう を ほう に改めるもの

　報　邦　寳　方　包　保　褒

　たゞし蘇枋の枋は發音に從い はう を おう に改める。

二　はふ 又は ほふ を ほう に改めるもの

　法

三　ばう を ぼう に改めるもの

　暴　冐　坊　房　亡　望　膨

四　ばふ 又は ぼふ を ぼう に改めるもの

　乏

第十二　オ列長音に發音される まう は もう に改める。

例

毛　孟　亡　妄　盲　望　網

第十三　オ列長音に發音されるやう、えう、えふはように改める。

例

一　やうをように改めるもの

羊　洋　樣　陽　楊

二　えうをように改めるもの

要　曜　遙　謠　夭　幼　杳

三　えふをように改めるもの

葉

第十四　オ列長音に發音されるらう、らふはろうに改める。

例

一　らうをろうに改めるもの

老　勞　郎　廊

二　らふをろうに改めるもの

臈　臘　蠟

（大正十四年二月二十五日官報第三七五一號附錄雜報八五）

第十五　ウ列拗音の長音に發音される　きう、きふはきゆうに、ぎうはぎゆうに改める。

例

一　きうをきゆうに改めるもの

休　丘　廐　臼　糾　久　柩　仇　求　朽

二　きふをきゆうに改めるもの

急　及　吸　級　泣　給

三　ぎうをぎゆうに改めるもの

牛

第十六　ウ列拗音の長音に發音される　しう、しふ　は　しゆう　に、じう、じふ　は　じゆう　に改める。

例

一　しう　を　しゆう　に改めるもの

修　舟　囚　秀　就　收　臭　秋　州

酋　袖　周

二　しふ　を　しゆう　に改めるもの

拾　執　集　襲　澁　習　輯

三　じう　を　じゆう　に改めるもの

柔　獸

四　じふ　を　じゆう　に改めるもの

十　什　汁　拾

第十七　ウ。列拗音の長音に發音される　ちう　は　ちゆう　に改める。

例

晝　丑　宙　抽　冑　肘　鑄

第十八　ウ。列拗音の長音に發音される　にう、にふ　は　にゅう　に改める。

例

一　にう　を　にゆう　に改めるもの

柔

二　にふ　を　にゆう　に改めるもの

入

第十九　ウ。列拗音の長音に發音される　びう　は　びゆう　に改める。

例

認

第二十　ウ列拗音の長音に發音されるりう、りふはりゆうに改める。

例

一　りうをりゆうに改めるもの

留　柳　流

二　りふをりゆうに改めるもの

立　粒　笠

第二十一　オ列拗音の長音に發音されるきやう、けう、けふはきようにぎやう、げう、げふはぎように改める。

例

一　きやうをきように改めるもの

杏　驚　狂　兄　競　鏡　强　京

經　鄕　饗

二　けうをきように改めるもの

校　敎　喬　橋

三　けふをきようにに改めるもの

脅　協　夾　俠

四　ぎやうをぎように改めるもの

仰　行　形　刑

五　げうをぎように改めるもの

堯　曉

六　げふをぎように改めるもの

業

第二十二　オ列拗音の長音に發音される　しやう、せう、せふ、は　しよう　に、じや

う、ぢやう、ぜう、でう、でふはじように改める。

例

一　しやうをしように改めるもの

相　正　商　詳　傷　省　生　唱　將

尙　聖　性　章　掌

二　せうをしようにに改めるもの

笑　尙　招　燒　消　詔　小　礁　照　少

三　せふをしようにに改めるもの

妾　捷　涉

四　じやうをじようにに改めるもの

上　情　淨　狀　讓　成　城　常

五　ぢやうをじようにに改めるもの

場　娘　釀　丈　杖　定　錠

六　ぜうをじやうに改めるもの

擾　饒

七　でうをじやうに改めるもの

條　嫋

八　でふをじやうに改めるもの

帖　疊

第二十三　オ。列拗音の長音に發音されるちやう、てう、てふはちように改める。

例

一　ちやうをちようにに改めるもの

停　提　丁　町　挺　長　腸　聽

二　てうをちように改めるもの

吊　鳥　朝　兆　超　調　彫

三　てふ　を　ちょう　に改めるもの

帖　蝶　牒

第二十四　オ列拗音の長音に發音される　ねう　は　にょう　に改める。

例

尿　饒　遶

第二十五　オ列拗音の長音に發音される　ひやう、へう　は　ひょう　に、びやう　べう　は　びょう　に改める。

例

一　ひやう　を　ひょう　に改めるもの

兵　平　評

二　へう　を　ひょう　に改めるもの

雹　表　俵　票　豹

三　びやうをびょうに改めるもの

屛　病　鋲

四　べうをびょうに改めるもの

苗　猫　猫　眇　廟

第二十六　オ列拗音の長音に發音されるみやう、めうはみょうに改める。

例

一　みやうをみょうに改めるもの

明　命　冥　名　茗

二　めうをみょうに改めるもの

妙　苗　猫

第二十七　オ列拗音の長音に發音されるりやう、れう、れふはりょうに改める。

例

一　りやうをりょうに改めるもの

良　兩　亮　令　領　涼　諒　量　梁

二　れうをりょうに改めるもの

聊　料　了　僚　寥

三　れふをりょうに改めるもの

獵

（大正十四年三月四日官報第三七五七號附錄雜報八六）

——臨時國語調査會　安藤正次——

四　當字の廢棄と外國語の寫し方

假名遣改定案補則は外國語の寫し方を規定したものであるが、一體外國語の表記については根本的にひろくこれを調査する必要があるけれども、それは他日に讓り、日常一般に用いられて居る日本化した外國語の寫し方が現在ははなはだ區々になつて居てまことに不便であるから、委員會においてこれを統一することにしたのである。

一、從來ヰ、ウヰ、ウィで書きあらわされている左の類の語はウィで書く

例　ショーウィンドー　Show-Window
スウイッチ　Switch
サンドウイッチ　Sandwich
スウィートピー　Sweet-pea

二、從來ヱ、ウヱ、ウェで書きあらわされている左の類の語はウェで書く。

例　ウェルカム　Welcome

ウェブスター辭書　Webster

ウェーター　Waiter

スウェーデン體操　Sweden

三、從來ヲ、ウヲ、ウォで書きあらわされている左の類の語はウォで書く。

例　ソーダウォーター　Soda-water

ウォーターシュート　Water-chute

サイドウォーク　Sidewalk

四、從來ジ、ヂで書きあらわされている左の類の語はジで書く。

例　ラジオ　Radio

ビルジング　Building

ジフテリア　Diphtheria

エジプト煙草　Egypt

五、從來ジュ、ヂュで書きあらわされている左の類の語はジュで書く。

例　ラジューム　Radium

イリジューム　Iridium

六、從來チ、ヂ、ティで書きあらわされている左の類の語はチで書く。

例　チップ　Tip

ニコチン　Nicotine

チーク　Teak

七、從來ヴ、ギ、ヴ、ヹ、ヺ、ヴァ、ヴィ、ヴェ、ヴォ、ブァ、ブィ、ブ、ブェ、ブォ、バ、ビ、ベ、ボで書きあらわされている左の類の語は、バ、ビ、ブ、ベ、ボで書く。

例　カーブ　Curve

オーバー　Over

ベルモット　Vermouth

ベランダ　Verunda

ボルト　Volt

備考　外國語の表記については根本的調査を進める必要があるが本案は假名遣改定案に對する補則として整理したものである。

尙委員會では次ぎのような固有の意味と無關係な漢字の用法（俗に言う當字）をやめてこれを假名で書くことにするがよいと決定した。

淺墓　淺ハカ

淺間しい　淺マシイ

荒増	アラマシ
荒方	アラカタ
穴賢	アナカシコ
穴勝	アナガチ
天晴	アッパレ
浦山敷	ウラヤマシク
薄野呂	薄ノロ
得共	エドモ
奥床しい	奥ユカシイ
得者	エバ
瓦落離	ガラリ
瓦落苦多	ガラクタ

甲斐がない　カイガナイ

虚呂〳〵　キヨロ〳〵

愚圖　グズ

愚圖る　グズル

險呑（劍難 劍呑）　ケンノン

劒突　ケンツク

胡麻化す（誤魔化）　ゴマカス

去程　サルホド

左程　サホド

左りながら（去りながら）　サリナガラ

左まで　サマデ

鹿爪らしい　シカツメラシイ

素敵　ステキ
青睛らしい　スバラシイ
素破　スハ
素破抜く　スツパヌク
頼母敷　頼モシク
鱈腹　タラフク
駄々　ダダ
駄々兒　ダダツコ
鳥渡　チヨツト
地團太　ジダンダ
圖太い　ズブトイ
圖體　ズウタイ

圖々しい　ズウ〳〵シイ
頓痴氣　トンチキ
胴慾　ドウヨク
頓間（頓馬）　トンマ
頓狂（狂與）　トンキヨウ
頓珍漢　トンチンカン
泥棒（泥坊）　ドロボウ
呑氣　ノンキ
野呂間　ノロマ
灰殼　ハイカラ
蠻殼　蠻カラ
果敢ない　ハカナイ

盆暗　ボンクラ
盆槍　ボンヤリ
變手甲（變挺）　ヘンテコ
眞逆　マサカ
滿更　マンザラ
間敷　マジク
間誤つく　マゴツク
無暗　ムヤミ
六かしい　ムズカシイ
滅茶苦茶　メチヤクチヤ
無茶　ムチヤ
滅多に　メツタニ

矢張　ヤハリ

八釜しい　ヤカマシイ

矢鱈　ヤタラ

（大正十五年五月十二日官報四一一三號附錄雜報一四六）

五　漢語の整理

わが國に於ける日常普通の談話や文章中には漢語がすこぶる豐富に含まれているが、しかるにこれらの漢語は漢字を標準として組立てられたものが多いので、自然目の言葉として生存し、耳で聞いただけではことの何の意味たるを知ることの出來ない場合が少なくない。かような語は學術上の用語にことに多いやうであるが、日常普通に用いれるものゝ中にもやはり少からず存在する。「齲齒」「義齒」のごとき「虫齒」「入齒」といえばだれにでもよくわかるが、「ウシ」「ギシ」ではちよつと迷はざるを得ない。「鳥小屋」を鷄舍、「テコ」を槓杆、「ツメイン」を拇印、「マブタ」を眼瞼とゆうようにわざく漢語を用ひるから意味が不明になるので、これらの漢語は字音のみを聞いてこの文字を見なければ理解に苦しむものである。

漢語は文字を基礎としてゐるために、同音語（homonyms）がすこぶる豐富で、これがために意味の不明や混雜を引起すことが多い。たとえば公爵と侯爵、市立と私立、令兄と令聞、保險と保健、火中と渦中、會合と邂逅、署長と所長、夫人と婦人、誌上と紙上とゆうやうな同音で異義の語が澤山あつて、たゞ耳で聞いただけでは、そのいずれであるかを判斷するに苦しむことが隨分ある。これらの同音語は前後の關係で大抵正確に理解することが出來るが、それにしても判斷に苦しむことが少なくない。支那では前後の關係によつてばかりでなく四聲によつてこれを區別しているから、わが國よりは不明や混雜を來す恐が少ないが、わが國では前後の關係にたよる外ないから、以上のごとき危險がなか〳〵多いのである。

一體、漢語は文字を基礎として組立てられることが多いので、自然目の言葉として發達する傾がある。むかしのように文章が主になつている時代では、目の言葉を中心としても別に差支がなかつたのであるが、今日の如く講演や演說が社會生活のもつと

も重要な要素になり、電話やラヂオが驚くべき發達をなしつゝある時代においては、文章よりもむしろ談話の勢力が强大である。その結果耳の言葉が目の言葉よりも重きを置かれる傾向を生じて來たが、今後電話やラヂオが發達するに從つてこの傾向がますく増大するに相違ない。東京日々新聞社と大阪毎日新聞社と電話で記事を交換する場合、一通話の分量が約六十行とゆうことになつているが、もし意味の不明な言葉たとえば意味のあいまいな同音語等を用いると、それがために通話の能率がすぐに減退するそうである。であるから通話の場合にはなるべく漢語にして耳なれないものを避け、きわめて明瞭な言葉を用いることにふかく注意することが肝要である。ラヂオの放送でもやはり同様で、生硬な漢語を羅列した原稿を朗讀する人がしばくあるが、かくのごときはまつたく無意味で、これを聞いても理解の出來ないことが多い。國語ならばラヂオにしても、電話にしても、相手をして理解に苦しませることがない、すくなくとも熟語の一部分が國語であれば、生硬な漢語を並べるよりははるかにわかり

易い。講談や落語は平民的なものであるから、あまり生硬な漢語は用いていない、これを用いるにしても日常の生活に用いられるきわめて普通なもの、すなわち、耳で聞いて容易に理解し得られるものばかりである。漢語でもすでに耳の言葉になつて、親しみのついたものはもとよりしいて避けるに及ばないが、耳の言葉としてのみの生命を有するやうな漢語はなるべく用いないようにすることが、愉快に容易に理解せしめる上から見ても、また國語の健全なる發達を促す上から見ても必要であると信ずる。

臨時國語調査會は先年常用漢字を選定してこれを發表したが、これが實行を容易ならしめるには、一方において漢語を整理する必要が當然生じて來るはずである。「侃々諤々」「薫蕕同器」「怒濤澎拜」というような漢語を用いながら漢字制限の目的は達しられない。「乾坤一擲」というよりも「いちかばちか」「のるかそるか」の方がはるかに理解し易いのであるから、二千字内外の常用漢字で生活上なんらの支障をも感じないようにするには、その必然の結果として漢語の整理を斷行しなければならん。先年來

各新聞社においても漢字の制限を斷行しているが、以上の關係から社内に調査部を設けて漢語の整理を行ひ、大阪毎日新聞社のごときは昨年の十一月「漢字制限に伴ふ新用語」を發行し、これによつて記事の整理に努めてゐる。

以上に述べたように、電話やラヂオの發達は目の言葉を避けて耳の言葉に重きを置かれる傾向を生じ、また新聞社でも印刷の能率を向上せしめるために漢字の制限を斷行するの必要を感じて來たので、その結果漢語が自然的にあるいは人爲的に整理せられる狀勢に立ち至つたことは、國語の健全なる發達をうながす上から見てまことに慶ぶべき現象である。臨時國語調査會においても、以上の狀勢に鑑み、昨年來漢語の整理に着手し、その案の成るに從いこれを發表し、すでに五回に及んでいるが、今後も引續き發表するはずである。調査會における整理方針は耳で聞いて理解し易く、しかも常用漢字で書きあらわし得るようにとゆうのであるが、しかし常用漢字で書きあらはされなくとも、耳で聞いて理解し得るものはそのまゝ假名で書く方針である。たと

えば「痙攣」「萄葡」「挨拶」「喝采」等のごとく、常用漢字では書きあらわせないが、耳で聞いてたゞちに理解し得る語はそのまゝ假名で書く、「間歇」「金箔」「結核」「月桂冠」のごとく一部分常用漢字で書きあらわせないものは「間けつ」「金ぱく」「結かく」「月けい冠」と假名を交せて書く積である。假名を交せて書くことを非常に嫌う人があるが、むかしから和歌や國書などにはそうした例が澤山あるが別に怪む人もない。これもつまり習慣によるので、見なれるに從ておかしく感じないようになるに相違ない。

要するに臨時國語調査會は大體以上の方針で漢語の整理を進めているが、これはもとより容易な事業ではない。しかし以上に述べた事情から年とともに漢語の整理が必要になつて來ることはもはや自然の勢である。ことに將來假名かローマ字を專用せんとする場合には、漢語の整理がそれに先立つてなし遂げられなければならない重要な事業である。（臨時國語調査會幹事　保科孝一）

（昭和二年六月一日官報一二五號附錄雜報一九八）

漢語整理案の一

本案は常用漢字の實行を圓滑ならしめ、ひいて國語の健全なる發達を促さんがため常用漢字と假名を用いて文章を書綴り得るよう漢語を整理したものである。尚その草案の出來次第漸次發表して社會の批判を求めるつもりである。

○印は常用漢字表にないもの

一貼○　一服、一包
一輛○　一臺
一遍○　一返、一度
一眸○　一目
三絃○　三味線
上梓○　印刷、出版

上肢○　腕、手

下婢○　女中、下女

下肢○　足

下腿○　すね、はぎ

下瞰○　見おろす

嚥○下　飲み下す

不遜○　無禮

乞丐○　乞食

攪○亂　かき亂す

椿○事　珍事

交懽○・交驩○　交歡

人蔘○　人參

人烟○　人煙
癈○人　廢人
仇讎○　かたき、仇敵
令閨○　奥様、令夫人
低徊○　低回
而○今・爾今　これから、今後、以後、自今等
信憑○　信頼
俳諧○　俳句、發句
庇○保　かばう
保姆○　保母
侵掠○　侵略
昏○倒　卒倒

撥兵	廢兵
怯懦	卑怯、臆病
攪拌	かきまぜる
邂逅	めぐり合う
歔欷	すゝりなき
旱魃	ひでり、かんばつ
腋窩	わきの下
眩暈	目まい
槓杆	てこ

以上は常用漢字で書きあらわし得ない漢語を部首の順序で集め、その中もはや現代の文章に用いられないものは捨てゝ、つねに用いられるものを専ら整理したのである尙全部常用漢字で書きあらわし得ない漢語中「痙攣」「喝采」「挨拶」の如く耳で聞い

てすぐ理解されるものは假名で書くことゝし、その他のものはなるべく整理する方針である。（大正十五年七月七日官報四一六一號附錄雜報一五四）

漢語整理案の二

安堵。　安心
彙。報　雜報
彙。纂　雜纂
瑕瑾。　きず
咳。嗽。　せき
矍。鑠。　達者・元氣
危懼。　不安
休憩。　休み、休息

凝聚○　凝集
挂○冠　掛冠
繋○屬　係屬
闕○位　欠位
闕○員　欠員
闕○勤　欠勤
勾○引　拘引
勾○留　拘留
蹉○跌　つまずく、失敗、失脚
爾○來　その後、それ以來
爾○餘　その他、その外
呪○咀○　のろう

聚合○　集合

焦○躁○　いらたつ、あせる

錠○劑　じよう劑

斟○酌　參酌、しんしやく

荏○苒○　ぐず〳〵

趨○勢　大勢、形勢

逝○去　なくなる、死去、永眠

全潰○　丸つぶれ、全壞

妥○協　(折れ合う)、だ協

痴○人　馬鹿、あほう

牴○觸　抵觸、ふれる

賭○博　ばくち

刀圭　醫術

動悸　動氣

瞳孔　ひとみ

憧憬　あこがれ

內帑　御手許金

捺印　押印、印を押す

破潰　破壞、破損

分泌　分ぴつ

斧鉞　大なた

噴嚔　くしやみ

葡萄　ぶどう

兵燹　兵火

拇印　爪印

抛棄　放棄

幇助　援助

彷徨　さまよう、うろつく

抛擲　なげすてる、放棄

朴訥　實直

勇悍　勇敢

利潤　利益

一粲に供す　お目にかける、御笑覧に供す

一氣呵成　一きに、一いきに

一攫千金　ぬれ手で粟

乾坤一擲　一かばちか、乘るかそるか

（大正十五年十二月八日官報第四二八七號附錄雜報一七六）

漢語整理案の三

曖昧　あやふや、あいまい

愛憎　すききらい

唖然　あつさ、あつけに取られ

暗々裡に　暗々裏に

暗翳　暗影、暗い影

按分　比例配分、あん分

按排　排例

壓搾　しぼる

威喝○　威す、威かす
萎○縮　すくむ、ちぢむ
允○許　許可、差許す
殷○賑　繁華、賑か
隠遁○　退隠
有卦○　うけ
迂○廻　遠まわり
齲○歯　虫歯
運搬○　運送、持運び
永劫○　永久、永遠、いつまでも
嬰○兒　赤ん坊、あかご、乳兒、乳のみ子
婉○曲　圓曲

寃罪　無實の罪、ぬれぎぬ

鏖殺　皆殺し

鞅掌　從事、取扱う、掌る

毆打　打つ、なぐる、おう打

押捺　押印、印を押す

懊惱　なやみ、もだえ

價値　價直、ねうち

割烹　料理、割ほう

脅喝　威す、威かす、おびやかす

鞏固　强固

享年　行年

琴瑟相和　夫婦和合

狷。介　片意地、偏狭

悃。願　懇願

誣。　中傷

刺戟。　刺激、刺撃

收穫。　收穫、取入れ

障碍。(礙)　障害

憔。悴。　やつれる

充塡。　つめる、こめる、つめこむ、埋める

腫。瘍。　はれもの、できもの

侵蝕。　侵食

浚。渫。　さらう

訊。問　尋問

制馭。　制御

閃光。　ひらめき、スパーク

內裡。　內裏

闖入　侵入、亂入

凍瘡。　しもやけ

內訌。　內輪もめ

二伸。　追申、再申

伴侶。　仲間、つれ

披瀝。　うちあける

畢竟。　結局、つまり、ひつきよう

不逞。　不良、不平

分娩。　出產、產む

鞭撻　督勵、はげます
餘燼　燃え殘り
來駕　來車、來臨
凌駕　凌ぐ

（大正十五年十二月十五日官報第四二九四號附錄雜報一七七）

漢語整理案の四

斡旋　周旋、世話、あつ旋
一生涯　一生
改竄　改訂、改正
改悛　改心
凱切　適切

剴

解傭　解雇
馘首　免職、やめる
核心　中心
覺醒　自覺、めざめ、目ざめる
苛政　惡政
苛税　重税
渦中　うずの中
葛藤　紛議、もつれ、もめ
官衙　官廳、官署、役所
管轄内　所管内
環境　周圍、境遇、まわり
箝口　口止め

贋。札　にせ札
喊。聲　ときの聲
陷穽。　落し穴
含嗽。　うがい
含嗽。劑　うがい藥
贋。造　僞造
感佩。　感激、感謝
贋。物　僞物、にせ物
感冒。　風邪　かぜ
緘。默　沈默、無言、だまる
涵。養　養成
義捐。　寄付

麾下　旗下、部下

企劃　企畫、計畫

疑惧　不安

旗幟　旗印

危殆　危險

吃音　どもり

杞憂　取越苦勞

糺彈　問責、責める

吃驚　びつくり

饗應　馳走、もてなし

疆界　境界

挾擊　はさみうち

敎唆○　そゝのかす
脅○迫　おびやかす、きようはく
伎○倆○　手腕、技量、腕前
襟○度　度量
苦悶○　苦しむ、もだえる
圭○角　角（かど）
痙攣○　引きつけ、けいれん
稀○有　希有、まれな
蹶○起　奮起
訣○別　生別、永別
乾○坤○　天地
研鑽○　研究

舷側　舟べり、舟ばた
堅牢　堅固
梗概　概要　あらまし
浩瀚　大部
恒久　永久
亢(昂)進　高まる
香奠　香典、香料
叩頭　頓首、おじぎ
勾配　傾斜、こう配
口吻　口ぶり
亢(昂)奮　興奮
廣袤　廣さ

渾身　滿身、全身
昏睡　人事不省
侍婢　侍女、女中
牆壁　障壁
八卦　占い、はつけ
半截　半切
不祥　不吉
侮蔑　侮辱、侮る

左記の漢語は廢棄する。

易簀　淹留　鯨飲　後董　剋厲　跫音　卑俚

（昭和二年三月九日官報第五五號附錄雜報一八七）

漢語整理案の五

慰藉　なだめ、慰しや

衣裳　着物、衣服、衣しよう

堙（湮）滅　消滅、もみ消す

有耶無耶　うやむや

穎才　英才

苛（呵）責　責め苦、せめさいなむ

花卉　花もの、草花

過剩　過多

訛傳　誤傳、誤報

俄然　突然、不意に、にわかに

海嘯。　津波、つなみ
解纜。　出帆、出港、船出
潰。亂　くずれる、ついえる
拐。帶　持ちにげ
恢復　回復
街衢。　市街
廓清　革正
擱坐　のり上げる
嵌。入　はめ込む
奸。計　姦計
寛恕。　寛容
喚。問　呼び出し

艱難　困難、難儀
間諜　間ちよう、スパイ
頑冥　頑迷
眼瞼　まぶた
畸形　奇形、不具
奇襲　不意打
吃水　舟あし、きつすい
拮抗　對抗、張り合う
巨擘　大家
巨刹　大寺院
凶歉　凶年、不作
協心戮力　協心、協力

驍○名　勇名、武名
驍○將　勇將
澆○季　末世、世も末
愚痴○　ぐち
懈○怠　怠る、なまける
怪訝　不審
溪○流　谷川
輕蔑○　侮る、さげすむ、輕んじる、輕べつ
輕佻○　輕薄、浮薄
勁○敵　强敵
嶮岨○　けわしい、けんそ
倦○怠　だるい、だれる、うむ

牽○強付會　こじつける

喧○騒　騒々しい、やかましい

眷○顧　愛顧、ひいき

眷族　一族一門

健啖○　大食

古刹○　古寺

糊○（餬）口　生活、くらし、口すぎ

糊○塗　ごまかす

痼○疾　持病

沽○券　ねうち、こけん

股肱○　腹心、片腕

固陋○　頑固

巷間　世上、世間
曠職　職務怠慢
曠古　未曾有
哄笑　大笑
嚆矢　初め、はじまり
鯁骨　硬骨
交錯　入り交じる
狡智　わるじえ
鴻業　大業

漢語整理案の六

（昭和二年六月八日官報一三一一號附錄雜報二二〇）

意氣軒昂　意氣大にあがる

開闢　開びやく、開闢以來、開けてこの方

楷書　かい書

該當　相當、當る

外貌　外見、見かけ

濶葉樹　かつ葉樹

甲冑　よろいかぶと

活潑　元氣、かつぱつ

喀痰　たん

喀血　血をはく

巖窟　いわや

管絃樂　管げん樂、オーケストラ

雁行 ならんで行く
貫祿 貫目、かんろく
間歇 かんけつ
瞰下 見おろす
杆格 一致しない、相容れない
寛濶 ゆつたり
駻(悍)馬 荒馬
祈禱 祈る、きとう
稀薄 希薄、少い、薄い
几帳面 きちようめん
詭辯 奇辯、こじつけ
危虞 不安

欺瞞　欺く

汽罐　汽かん、釜、ボイラー

氣鬱　ふさぐ、氣鬱症、氣うつ症

逆襲　反擊、逆しゆう

拱手　手をこまぬく

叫喚　叫び、わめき叫ぶ

頬骨　ほうぼね

僥倖　ぎようこう

兢々　びく〳〵

屹立　そびえる、そばたつ

均霑　浴する

金箔　金ぱく

欣○幸○　喜び、幸い
矩○形　長方形
寓○居　假住居
桂庵○　周旋業、口入所、けいあん
輕躁○　輕卒、かるはずみ
谿○谷　谷、谷間
閨○秀　女流―詩人―小說家―畫家
激昂○　激す
結核○　結かく
譴○責　けん責
眩○惑　目がくらむ
絢○爛○　華やか、きらびやか

涸渇　枯渇
溝渠　溝
媾和　講和
廣濶　廣い
荒蕪地　荒地、不毛の地
後胤　子孫
慷慨　こう慨
狡猾　ずるい、わる賢い
膠着　くつつく
傲慢　ごう慢
魂魄　たましい、こんぱく
棍棒　こん棒、棒

骨董。　骨とう
忽焉。　たちまち
克。己　自制
召喚。　呼び出し
撤。去　引上げ、引拂い、取扱う、取りのける
撤。回　もどす、引込める
撤。廢　廢止
反撥。　はね上がる、はねかえす、はねる

（昭和二年六月十五日官報一三七號附錄雜報二〇一）

漢語整理案の七

遺骸。　なきがら

威嚇○　威す、おびやかす
頤使○　あごでつかう
圍繞　めぐる、めぐらす
一挺　一丁
隱匿○　隱す
怨嗟○　怨み
謳歌○　稱贊、おう歌
旺盛○　さかん
諧謔○　おどけ、じようだん
開墾○　開拓、開く、開こん
乖離○　そむく、離れる、寢返り
確乎○　確固、しつかり（―不拔、確固不拔）

苛酷　過酷、きびし過ぎる
奸策　わるだくみ
奸商　惡商人
奸智　姦智、邪智
徽章　記章
羈絆　束縛、きずな
驍勇　剛勇
區劃　區畫
囈語　ねごと、うわごと
喧噪　騷がしい
喧傳　評判
肯綮　急所

恍惚　うつとり、見とれる
梗塞　ふさがる、つまる
公生涯　公生活
恒例　常例
剛愎　強情
些少　少々、少しばかり
撮影　寫影、寫し取る
殺戮　殺す
雜沓（還）　雜踏、混雜、人込み、込み合う
殘骸　死體、むくろ
慚愧　汗顏、赤面
撒水　散水、水まき

撤布　散布

惨憺　悲惨、物すごい、さんたん

思惟　思考、思う、考える

弛緩　ゆるむ、たるむ

歯齦　はぐき

刺繍　縫取、ししゆう

辭彙　辭典、辭書・字引

字彙　字典、字引

時代錯誤　時代遅れ、時勢遅れ

昵懇　別懇、懇意、親しい

嫉妬　やきもち、りんき、ねたみ、そねみ、しつと

惹起　引起す

藉口　かこつける
遮断　止める（交通—通行止め）
驟雨　にわか雨、夕立、むらさめ、しぐれ
什器　器具
蒐集　収集、集め
終熄　終息、止む
首魁　首領、元凶、かしら
宿痾　持病
須臾　しばらく、やがて
書肆　書店、本屋
捷径　近道、早道
猖獗　猛烈、暴威

常套語　慣用語、口ぐせ、きまり文句（―手段慣用手段）
商舗　商店
捷利　勝利
焦慮　心配、苦心、あせる
熾烈　烈しい、さかん
竣工　落成
呻吟　うめく、うなる
斟酌　手加減、手心、酌み取る、しんしやく
浸潤　しみ込む、にじむ
進捗　進行、はかどる
塵埃　ちり、ごみ
迅速　神速、急速

盡瘁　盡す、骨折る
潤澤　豐富、じゆんたく
淳風美俗　良風美俗
誰何　呼びさがめる
碇泊　停泊
遁竄　逃げ隠れる
徘徊　うろつく、ぶらつく
胚胎　きざす、はらむ
誹謗　そしる
紛擾　紛爭、騷ぎ、もめ
睥睨　にらむ、にらまえる

（昭和二年七月二十日官報一六七號附錄雜報二〇、六）

漢語整理案の八

些細　わずわ、いさゝか、さゝい
左袒　加擔する、味方する、賛成する
猜疑　疑い深い
錯誤　誤り、間違
錯雜　入交じる、込入る
參趨　參上
讃美　賛美
山巓　山頂
仔細　わけ、しさい
揣摩臆測　推測

羞○恥　はにかむ、恥かしさ
質朴　質實、しつぼく
執拗　しつこい
奢侈○　ぜいたく、おごり
洒○脱　さつぱり、あかぬけ
這○般　今般、かよう
舟楫○　舟行、水運
澁○滯　停滯、はか取らない
逡○巡　ためらう、しりごみする
遵○守　守る
諄○々　懇ろに、くど〱
遵○奉　奉ずる、守る

所詮○　つまるところ、しよせん

抒○情詩　叙情詩

銷○夏　消夏

霄○壤○　雲泥天地

陞○進　昇進

悄○然　しお／＼、すご／＼

證憑○　證據

饒○舌　多辯

震駭○　色を失う、震え上る

眞摯○　まじめ

滲○透　しみ通る

人心收攬○　人望を得る

杜撰　粗漏、ずざん

衰頽　衰退、衰える

水泡に歸す　無駄になる

正鵠　要點—を得當る—を失すはずれる

凄慘　ものすごい

棲息　すむ

掣肘　抑制

儕輩　同人、同輩、仲間

贅言　駄辯、むだごと

噬臍　後悔

折衷　折中

船暈　船よい

僭○越　出過ぎ、せんえつ

譫○語　たわ言、うわ言

銓○衡　選考

穿鑿○　せんさく

尠○少　少々

戰捷○　戰勝

洗滌○　洗淨、洗う

羨○望　うらやむ

戰慄○　ふるえる、おのゝく

狙○擊　ねらいうち

蔬○菜　野菜

沮○止　防止、くい止め

沮○喪　衰える、くじける

挿○畫　さし畫

操觚○者　記者

綜○合　總合

踪跡○　行方、所在

裝幀○　裝釘

挿○入　さし入れる、さし込む

聰○明　英明、はつめい

遜○色　見劣り

忖○度　推測、あて推量、おしはかる

敦○厚　篤厚

嫩○芽　若芽、新芽

反映○　反影

（昭和二年七月二十七日官報一七三號附錄雜報二〇七）

漢語整理案の九

截○斷　切斷

餞○別　はなむけ、せんべつ

粗餐○　粗飯

仄○聞　聞けば、聞くところによれば

唾○液　つば、つばき

打撲○傷　うちみ

逮○捕　捕縛

退嬰○　しりごみ

對峙　對立

頽廢　荒廢、すたれる

頽齡　老齡

丹誠　心盡し、たんせい

赧顔　赤面

彈劾　問責、だんがい

斷崖　がけ

斷乎　斷然、きつぱり

智囊　ちえ袋

治癒　全快、なおる

緻密　綿密

褫奪　取上げる

註◦解 注解
註◦文 注文
抽籤◦ くじびき、ちゆうせん
稠◦密 濃密
厨◦夫 料理人、炊事夫、コック
衷◦心 心から、中心
駐屯◦ 駐在
駐剳◦ 駐在
嘲◦弄 あざける、ちようろうする
貼◦付 はりつける
寵◦愛 可愛がる、ちようあい
痛痒◦を感ぜず いたくもかゆくもない

鄭重　丁重、手厚い

蹄鐵　てい鐵、かなぐつ

泥濘　ぬかるみ

徹宵　終夜、徹夜、夜どうし

恬淡　淡白、あつさり

店舗　店、商店

纏綿　からまる

堵列　整列

杜絶　とだえる、とまる

塗抹　ぬりつぶす、ぬりけす

吐瀉　吐き下し

鍍金　めつき

土塊○ 土くれ

怒濤○ 荒波

逗○留 滯在、とうりゆう

謄○寫 寫す、とう寫

謄○本 寫し、とう本

棟梁○ 頭領、親分

登攀○ 登る、よじ登る

蕩○盡 つかい果す

跳○梁 はびこる

跳○躍 はね上る

洞○察 看破、見ぬく

遁○走 逃走

内偵。　内探

嚢。中　懐中、袋の中

跋扈。　のさばる、ばっこ

分岐。　分れる

僻。陬。　片田舎

餘韻。　餘音、餘情

戮。力　協力

陋。劣　賤劣、下劣

（昭和二年十月十九日官報二四三號附錄雜報二一九）

（同　年十月二十六日官報二四九號附錄雜報二二〇）

漢語整理案の十

銷○磨　消磨

尖○端　先端、さき

咀○嚼○　かみこなす

挿○秧○　田植

隊伍○　隊

煖○爐　暖爐

佇○立　たゝずむ

打擲○　なぐる、打つ、ちようちやく

恬○然　平然

蠱○毒　害する、毒する

徒儞　むだ、無意味

禿頭　はげ頭、とくとう

訥辯　不辯舌、とつ辯

頓挫　くじける、とんざ

韜晦　くらます

盗癖　手くせが悪い

島嶼　島々

慟哭　號泣、泣き叫ぶ

獰猛　猛惡、凶惡

撞球　玉突

把捉　つかむ、捕える

把握　掘る

播種　種まき
波瀾　騷動、こだ〳〵、はらん
波濤　浪浪、波路
罵詈　惡口、罵る
拜趨　參上
排擠　排斥、おしのける
排泄　排出―物、排せつ物
薄倖　薄辛、不仕合
莫大　多大、ばく大
驀進　突進
攀登　よじ登る
氾濫　あふれる、はんらんする

輓○近　近來、近頃

拔萃○　拔書き、ばつすい

拔擢　選拔・より拔く、ばつてき

（昭和二年十二月七日官報二八三號附錄雜報二二五）

漢語整理案の十一

悖○德　背德

媒妁○　媒酌、なこうど

剝○奪　奪う、はぐ、取上げる

剝落　はげる

曝○露　暴露

瘢痕　きずあと

搬入　持ち込み、運び込み
搬出　持ち出し、運び出し
繙讀　讀む
煩瑣　煩雜、煩わしい
飛沫　しぶき
蜚語　飛語
裨益　資益、資する、益する
裨補　補う
肥沃　肥えた、肥えて
秘訣　奥義、極意
疲憊　疲勞、疲弊
糜爛　腐亂、たゞれる

微醺○　微醉、ほろ醉

瀰○漫　みなぎる

彌○縫　取繕う、間に合わせる、びほう

敏捷○　機敏、すばやい、すばしこい

瀕○死　死にかけている、危篤、ひんし

擯○斥　排斥

憫○察　憐察

漂○然　ふらりと

瓢○然　ふらりと

剽○窃　ぬすむ、ひようせつ

謬○見　誤見、間違つた考

逼○迫　必迫、ひつぱく、つまる

畢○生　一生、終生

孵○化　かえる、かえす、ふか

腐爛○　腐亂、腐敗

無聊○　徒然。退屈、ひま

俘○虜　捕虜

附箋○　附け紙、ふせん

扶掖○　扶助

浮腫○　むくみ

不愍○　（不憫）かわいそう、ふびん

不撓○　不屈

覆轍○　失敗の跡

復讎○　復仇、敵うち、ふくしゆう

福祉　福利
扮裝　こしらえ、假裝
憤懣　憤怒、立腹
紛紜　紛爭、ごた〱
風采　容姿、風さい
拂拭　ふき取る、はらう
拂曉　あけがた
劈頭　眞先に、第一番に
碧空　青空
瞥見　一見、ちよつと見る
蔑視　輕視、見下げる
遍歷　遊歷、巡遊

扁。平　平たい

騙。取　かたる

邊。鄙。　片田舍、へんぴ

（昭和二年十二月二十八日官報第三〇一號附錄雜報二二八）

漢語整理案の十二

直。披。　親展

白。痴。　馬鹿、はくち

曝。書　虫干し

瀑。布　瀧

莫。連者　あばずれ

賁。臨　光臨

婢。僕　召使
秕。政　失政、悪政
標。榜。　看板にする、ふりかざす、ひょうぼう
描。寫　寫出す、畫き出す
病。褥。　病床
埠。頭　波止場
敷。衍。　敷延、引延ばす
墳。墓　墓
偏。頗。　不公平、片手落、へんぱ
斃。死　死ぬ、倒れる
平。坦。　平ら
蒲。柳　虚弱、かよわい

補塡○　補充
舗○装工事　敷装工事
拇○指　親指、母指
崩潰○　崩れる
萠○芽　めばえ
鋒鋩○　鋒先
豐饒○　豐な、肥えた
放肆○　放逸、放縱、わがまゝ
放埓○　不行跡、不品行、だらしない
咆哮○　ほえる、どなる
茅○屋　草屋、小屋
翻○然　飜然

翻○譯　飜譯、反譯

撲○殺　打殺す、ぼくさつ

勃○興　興隆、ぼつこう

勃○發　突發

痲痺○　しびれ、まひ

抹○殺　打消す

邁○進　直進、猛進

瞞○着　ごまかす、まんちやく

明晰○　明瞭、明白、めいせき

酩○酊○　大酔

朦○朧○　ぼんやり、もうろう

蒙昧○　無智

妄動（ぼうどう）　盲動
沐浴　入浴、もくよく
勿怪の幸　もつけの幸

（昭和三年六月二十日官報第四四三號附錄雜報二五二）

漢語整理案の十三（その一）

本案は常用漢字の實行を促進し、ひいて國語の健全なる發達を圖らんがため漢語整理の第一期の事業として常用漢字と假名を用いて書綴り得るように漢語を整理したものであるが「痙攣」「勾配」等耳なれた漢語はそのまゝこれを「けいれん」「こう配」等のごとく假名で書くことにした。なお本案のごとき漢語整理はこれまでに十二回發表しているが、この十三回を以て第一期の整理を打切り、つぎに漢語整理の第二期に入る豫定である。

軋。轢　すれ合う、あつれき

迂。遠　まわり遠い、うえん

掩。護　かばう、えん護

崖。下　がけ下

胸。襟を開いて　打さけて、腹藏なく

匡。正　正す

扈。從　供奉、お供する

措。置　處置

挫。傷　くじき

挫。折　くじける

四。肢　手足

自。彊　自強

倏忽　たちまち、突如

習癖　くせ

終焉の地　永眠の地

精緻　精巧

蟬脫　拔け出る、脫する

惻隱　同情、あわれみ

妥當　適當

頽廢　荒廢

馳驅　馳驅

陳套　陳腐、古臭い

蟄居　閉居

凋落　衰微、衰える

天稟○　天性、生れつき
撤退○　引上げ
搭載○　載せる、積む
曩日　先頃、先般
庇護○　援護、かばう
黽勉○　勉強
剽盗○　追はぎ
不虞○　不慮、不意
防遏○　防止
滿腔○　心から
瞑想○　默想
悶着○　ごた〳〵、物議、もんちやく

目睫。　眼前、目前
野鄙。　野卑
揶揄。　からかう
藥餌。　藥
輸贏。　勝敗、勝負
誘拐。　かどわかす、誘かい
誘掖。　誘導
遊蕩。　道樂、遊とう
遊廓。　遊かく、遊里
宥恕。　寛容、許容、許す

（昭和三年十二月五日官報五八二號附錄雜報二七四）

漢語整理案の十三（その二）

悠々　ゆう〱
悠然　ゆつたり、ゆう〱
悠長　のんびり、のんき、ゆうちよう
悠久　ゆう久、長久
幽邃　ゆうすい
優渥　優あく、お手厚い
餘薀なし　餘すところなし
庸才　凡才
膺懲　打懲らす
夭折　若死、早死

妖怪　化物、よう怪
妖艶　仇っぽい、なまめかしい
妖術　魔術
邀撃　要撃
容皃　顔だち、容ぼう
容喙　差出口、口を出す
要諦　要道
傭兵　雇兵
傭人　雇人
傭船　雇船、チャーターする
螺旋　ねじ、らせん、ー條、ぜんまい
拉致　引致

磊落　豪放、らいらく

落胤　おとしだね、らくいん

落伍　落後

落魄　零落、落ちぶれたる

辣腕　すご腕、らつ腕

懶惰　怠惰、なまける

爛熟　熟し切る、らん熟

濫觴　起源、はじめ

理窟　理屈

俚言　俗言

俚謠　民謠、俗謠

俚諺　ことわざ

釐○革　改革
輪廓○　輪かく、アウトライン
淪○落　墮落、さすらい、落ちぶれ
吝○嗇○　けち、しわい、りんしょく
霖○雨　なが雨
流暢○　すら〳〵、流ちょう
縷○々　なが〳〵、こま〳〵
縷○述　詳述
屢○報　既報
羸○弱　虛弱
黎○明　あかつき、あけぼの、れい明
憐愍○　憐み

恰悧　利發、利巧

厲行　勵行

轢死　ひき殺される、れき死

輦轂の下　お膝元、帝都

濾過　こす

魯鈍　愚鈍

壟斷　獨占

狼狽　うろたえる、ろうばい

陋屋　弊屋、拙宅

陋風　弊風

陋習　弊習

陋態　醜態

牢乎として　堅固に、しつかり

牢獄　獄、ろう屋

牢記　強記

牢死　獄死

籠絡　まるめ込む、ろうらく

老獪　ずるい、老かい

漏洩　漏らす、漏れる

老舗　しにせ

矮軀　短身、こがら

矮小　短小

猥褻　みだら、わいせつ

賄賂　わいろ

彎。曲　まがる、わん曲

（昭和三年十二月十九日官報五九四號附錄雜報二七六）

臨時國語調査會發表　漢字漢語假名遣整理案　終

正誤表

頁	行	誤	正
四	一二	ことである	ことである。
七	六	冬　凉	冬　冷　凉
八	一二	喪	喪
一〇	六	展	展
一五	一	滓	津
二二	一二	遁	週
二三	六	釣	釣
一二一	一	鍋	削除
一三三	一二	よじる	よじる（攀(ヨ)ぢる）
一四一	八	（すつぼう酸）	（すつぼう　酸）
一四四	一〇	い	い、
一四五	八	かげる	かゝげる
一四六	七	大皇	天皇
一四九	二	壞	壞
一五六	八	冒	冒
一六五	三	牒	牒
一七二	五	アツパレ	アッパレ

頁	行	誤	正
一七三	二	キヨロ〳〵	キョロ〳〵
一七四	四	スツパヌク	スッパヌク
同	八	ダヾツコ	ダヾッコ
同	九	チヨツト	チョット
一七五	五	トンキヨウ	トンキョウ
一七六	一〇	メチヤクチヤ	メチャクチャ
同	一二	メツタニ	メッタニ
一七八	五	多いやう	多いよう
同	六	いれる	いられる
同	九	用ひる	用いる
一七九	一	ゐるため	いるため
一八一	五	有するやうな	有するような
一八四	七	一臺	一台
一八五	七	無禮	無礼
同	九	攪。亂。	攪乱
同	九	かき亂す	かき乱す

頁	行	誤	正
同	一二	人參	人参
一八六	二	廢人	廃人
同	五	低回	低回
同	六	爾今	尓今
一八七	一	廢。兵	廃兵
一八九	八	勾留	句留
同	八―九	脫漏	薨。去　おかくれになる　死去、永眠
同	九―一〇	脫漏	參籠。　こもろ、おこもり
一九〇	九―一〇	脫漏	磔刑。　はりつけ
同	同	脫漏	勅諚。　勅命（勅旨）
一九一	七	脫漏	徘。徊。　ぶらつく
同	一〇―一一	脫漏	蜉。蝣。　かげろう
一九三	六	取らてれ	取られて
一九六	三	誣。	讒。誣。
同	六	（礙）	（礙。）
一九八	一	鞭。韃。	鞭。撻。
二〇〇	五	含喇。劑	含嗽。劑
同	九	感冒。	感冒。
二〇三	六	（昂。）	（昂。）
同	一一	（昂。）	（昂。）
二〇四	五	はつけ	はつけ
二〇五	五	有耶無耶	有耶。無耶。
同	六	穎。才	穎。才
二〇六	三	潰。亂	潰。乱
同	五	回復	回復
二〇七	一二	協心・協力	協心協力
二一三	三	氣鬱。	氣鬱。
同	同	氣鬱症	氣鬱症
二一四	四	桂菴	桂。菴
二一六	六	撤。回	撤。回
二一七	二	頤。使	頤。使
同	四	一挺	一挺。
二一九	一	うつとり	うつとり
二二〇	六	ししゆう	ししゅう
同	一一	しつと	しつと
二二一	七	元凶	元兇

頁	行	誤	正
二二二	六―七	脱漏	皴。成 落成
二二四	二	わずわ	わずか
同	三	加擔する	加担する
二二五	五	さつぱり	さっぱり
二三一	八	きつぱり	きっぱり
二三二	三	ちゆうせん	ちゅうせん
同	五	コツク	コック
二三三	五	あつさり	あっさり
同	八	堵列。	堵。列
二三五	三	跋扈。	跋。扈。
同	同	ばつこ	ばっこ
二三七	一〇―一一	脱漏	把。持 持つ つかむ
二三八	七	排出―物	排出、―物
同	八	薄辛	薄幸
二四〇	五	飛沫。	飛。沫。
二四六	一〇	咆哮。	咆。哮。
二五四	六	差出口	差出口（さしでぐち）
同	一一	―條	―条

臨時國語調査會發表

漢字漢語假名遣整理案

奥附

著作權所有

昭和四年三月二十日印刷
昭和四年三月三十日發行

【定價金貳圓】

編者 木枝増一

發行者 永田與三郎 大阪市南區内安堂寺町一丁目二八

製版者 谷口松市 大阪市東區清水谷西之町三一四

印刷者 富永貞三

發行所 東京市神田區錦町三丁目九 大阪市南區内安堂寺町一丁目二八 奈良市南半田西町十三 東洋圖書株式合資會社

(直接註文一手取扱) 大阪市南區・内安堂寺町一丁目二八・振替大阪三九五五六番

大賣捌所 (東京)文修堂 (大阪)寶文館・盛文館 (名古屋)川瀬・星野 (京都)京都書籍・博省堂 (奈良)木原文進堂 (久留米)菊竹 (佐賀)大坪 (熊本)長崎

印刷所 東洋圖書株式合資會社印刷部

製本所 日本印刷製本株式會社

東洋圖書の教育書

六版

關西學院教授 砂川寛榮先生著

實力養成 學生新學習法

定價〇・六〇 送料〇・〇六

□競爭激甚の今日眞の學習法を會得し全我を伸すものが最後の勝者である。□本書は新教育の精神を如實に示された良書で此を會得せば誰人も自ら伸び自ら太る獨學生勉學指針たるのみでなく處世の必讀書

四版

奈良女高師訓導 池田こぎく先生著

私の教育記録

定價二・八〇 送料〇・一六

□教育の根本態度に初まつて、教育上の改革方針と其の實例とを獨特の名文を以て示された。□更に其體驗されたる合科學習の實際を丹念に記錄されてゐる。□言々句々何物かを暗示する力の充ち滿ちた名著。

重版

奈良女高師前教官 永田與三郎編

大正初等教育史上に殘る人々と其の苦心

定價二・五〇 送料〇・一六

□明治の模倣を脱却し學習主義教育の殿堂を開いたのは幾多實際家の努力の賜である。□本書記する二十餘家の表面華々しき成果の裏面には慘憺たる苦心を秘めてゐる。此尊敬すべき記念塔は後進者指導の無二の良書

五版

奈良女高師教 須山法香齋先生著

投入れ盛り 花の活け方

定價一・〇〇 送料〇・〇六

□奈良女高師にて附屬高女、附屬實女の教科書に採用す。□一流に偏せず各流共通の基礎事項を網羅す□價低廉にして而も生涯携帶し得る美本、□女學校活花教科書の外一般參考書に良し。

四版

奈良女高師教授 秋草ちか先生 中原イネ先生 共著

寫眞による 作法實習記録 本膳の饗應

定價〇・五〇 送料〇・〇四

□我が國古來の崇高優雅な作法中特に古典的代表たる本膳の饗應につき一々詳細な寫眞により一目瞭然たらしめたものである。□本膳饗應の什器を初め進撤の次第、食事の作法・献立・料理法のすべてを詳說す。

三版

京大教授 小西重直先生序、青木文子女史抄譯

母より先生へ

定價二・五〇 送料〇・一四

□譯者青木夫人は母となる前後子供の問題についてこの原著ほど暗示と開發とを與へたものはありませんと申してをられる。□小西博士は子供を眞の子供にまで育てあげる情熱の巨火であると推奬してをられる。

東京・大阪 東洋圖書株式合資會社 發兌

(直接註文一手取扱)大阪市南區內安堂寺町一丁目・振替大阪三九五五六番